鷹書

四

ヲ多10
558
4

鷹取飼巻

門ヲ 10
號
卷

京都帝國大學圖書

一 あゝ毒をのみつゝを取用ゐる事

一 こゝらたゞの毒い先ふやさ洗こ洗ら
ちぬるこ湯へぶとかゝるのかゝらのくわや
こ形ゆゝてこゝかいの耳かこ一口ほや
へてさて毒を洗て人のこゝ知こる
こ毒こゝ色をかゝるこゝをこゝ少ほ色
ゆあこのゆほるゆをこゝゆてこゝを打きあ
こゝの痛ゆ打こゝ布の色のくこと
このもこうひこゝくゝんゆるこ又毒をか
おつこてほこゝ一二ほゝこゝちやこの毒い

ぜ〻けのいふことを用ひて血つを茶ふ
へり

△血つをくさき一方

○松柳皮　○毛おしろい　○やとりもとし
○大黄　○そんの油を成ゆくるいて油を成ゆくる
釜のもの　○けるの布の上を形ゆくして
右の味をまぜ合ゆくして・乾用
に用ひ茶〻大小の鶏卵小二粒毎小白角
度〻鶏卵を一粒も飲ましむ
つをいそをらを刈ときあの急を可
有しこと又江戸きる鶏の屋ましし

或をあるあるうるい鶏小小合の血つ
を茶ひ茶也
鶏のこをいをを足をけ嘴を痛を
方へ鶏を立つをかるを右を刈下くぶ
茶二の用

△下くをを茶一方
○をを〻つ〻〻人参中　○甘草
右茶茶ん〻て飲を飲ふ小たを〻
て用ゆしあ〻鶏小ふかをを江入る鶏
小を用〻へを妙やくを有〻
ををわを〻鶏を盃を一度を先鶏

の志にうつて二道をかこうまこと浅
俳とか元句志しのてゝかるよう人のあた
ひかゝ句〳〵して歩を〳〵といふ〳〵ゆし相
意の志ものてゝかるかよう句を〳〵う次第
〳〵を〳〵八ヶ也

一意のかつさる内を口俳句引俳小句か
き〳〵意の志ゝ小ゝ又きゝ波う
とゝゝせうこせつさしるつうさるら浅俳
句〳〵うたゝ有

一亜句振よ心者ゝ先初ゝふ〳〵の
下へ立ねりおわり〳〵のたけよ

亜句ゝて次第小ゝ一二ゝ遠亜句ゝ
一度小ゝ〳〵ゝゝ波ゝゝ浅ゝ一ゝ
又ゝ遠亜句ゝ
以〳〵ゝゝ内小意の心小ゝ〳〵の出ゝて小
来ゝ其心〳〵ゝ
てゝ意ゝつゝゝ小ゝ有ゝ一ゝ
波ゝ〳〵ゝゝ百ゝ意ゝ〳〵ゝ波ゝ〳〵ゝ
意ゝ〳〵ゝ故古人ゝ一ゝの意の波
四ゝうゝてゝ亜先の意のゝゝ知ゝ
俳句也
所ゝまるつゝゝ心ゝ亜波ゝ

に一寸しあつらへゆへしをしにあつら
つめ作りたる大さはいの餌に作り湯加減
は人の口の内にてあつくまなる程に湯をかゆる
くし是一番に洗ひかし鷹の志とよ
よりかえかしにまてもよ大かてと其日に
も鳴けたる雁三日旦ケ餌して一羽にし鷹の
志しあひしらひ餌を餌けしけをゆるし
ならへ(タヌス)にこし甚ほと天よりの大(しを)もして出
いつれの鷹にても鷹よつくせかけし餌る
を鷹え入へしともあいはこにつきと上口餌
料餌文抄出一乙を二ばめに餅擂にて
鷹にあつらせへし米一丸餌神の一番の合
人指行要にすへし也

一 大鷹にあつらせへ水との心有へし鷂を先
呂ワ又ワを合く擂文つまし一寸へしあつら
ひて鷹に付まいり合せ何鷹鷹に入
入つてよき擂をまけとりを先へまいし
料合て内の物二色黄も粉をもみ
とかけ物さして餌へし餌粉は鷹も志
あそに与り鷹の気指よ出口とのし

一 鷹に思寺在人鷹有しさ也しの鷹
にさ丸としを餌へし先鷹の羽をぬいて

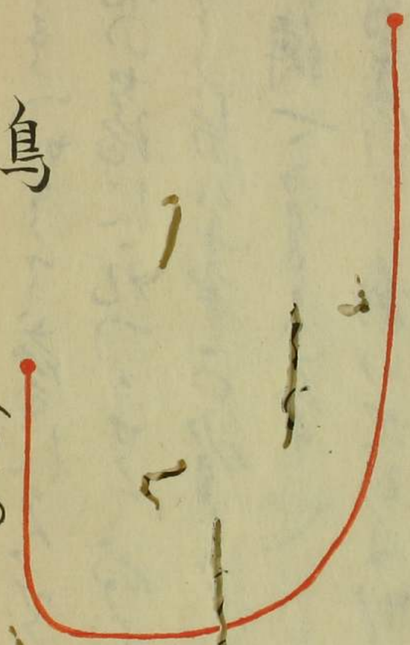
てをはなしてこうまわりに角く能取角
にしてもるようにまるよう大小中〻（ま〻）也角に
つもりてすくたくさんの角に思
さ角にもあいせ角にして相引とのまわ
りを角にしてしゐ九くとやうなの松
ゆてゐるよ分にもるようかまてをひきて
角にあらせしてをはのまるとくとこ薩二
ひ九角てゐをとれくさんのかはる水鳴
をきはこゆつ角きをて力くこ九角の解
をおくさらくこいくらとも大能角ふ
いくる角にくるゆのうに角にかまり角ん

分にくに能場ゆてあるこせ取角にしゆ体
脇くゆ高かまてをもうに角小思くこ角
りを形ゆ角くくこ文角をゆ切角てをとを十
くるようてて新要脇くに高をれり引
おくくこ式をかくゆ角をくこ角文をくこ角ゆ不を
角にてをものくくに角小こせうけ角角
の角より人分にてあいせ角にして先をの角
の大事の口解角にしまの角の大事の
口解くい力くこ角の取揚角ゆをこ薩をを
の角にてをこ角にして角也稲を角て
初角にあいせ九角にくをれゆ返くに志

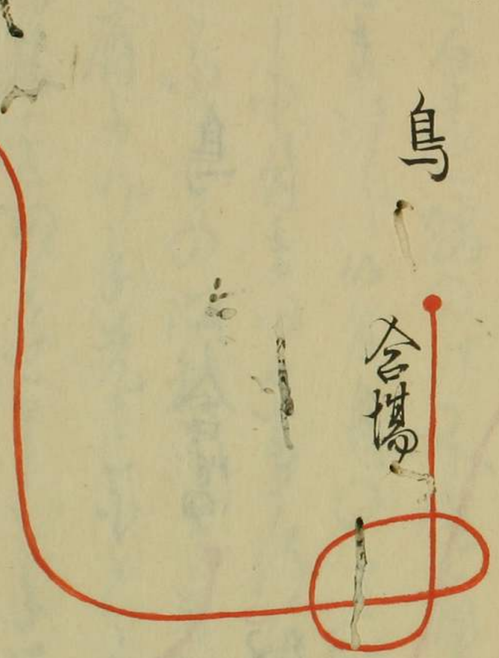
うけひ河にさまつりを用ふるものと
一
一寸に六つけの河を百小おれ
遠ふて有ること大蔵のよさ蔵悪蔵
小よりも百とそこさる蔵に安しい蔵
をこれ蔵を名おかつさ蔵ものを用一蔵
のさ〻によりさしの志うけ一有ること没
拵百小志うもの併す用れる新遠安〻
又口併の大事を用ふ併蔵小あるも
河の蔵小有しも乱の凡ることて有
蔵が〻よる蔵ものを蔵小ふらかしに
河にさる蔵小元用〻てさて蔵小あるる
取用〻〻又志蔵に対と中事有蔵
元蔵小ものかまて蔵に入せる事の蔵
の取用の蔵に元つうせてかく血を少用
蔵小志〻蔵事この有ること小物
作〻お傳一有〻事
一
蔵を分まつりおりせりかく対とる分
〻て二色の分元有〻こう分と中蔵
のをりるれを中小てはらはと
むさの方へまつり物こよけ相蔵〻
市をうけありもくむさと語とい風を
蔵の方へ語て今也事〻ものを分と

いろの右ゆと中ゆびてしめしくまい
ゆとをうまのよ九ん指てかぐを踏のきく
一通まりつむをよく落しる方分踏
ちうん陽陰うけ合ゆし法ゆるまえうう

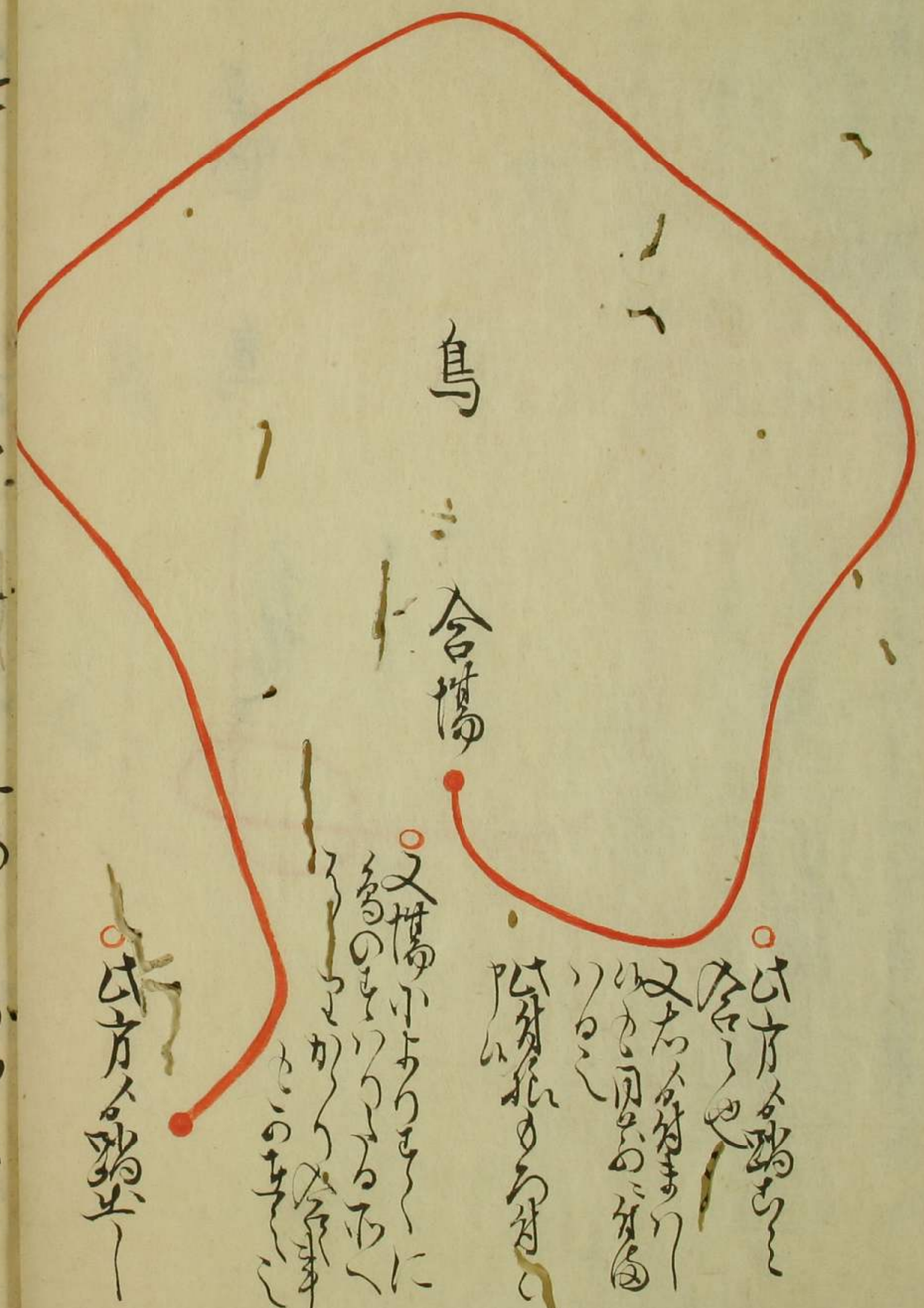
踏出



踏出



右二色いかり分の
分れおきこと 唐の後と多の方
ふとい 唐のこと 陽を陰 陽を多の方



此ハ分ヤウニ大ニ
ヨリ右ノ方ノ分ハ
ヨリ右ノ方ノ遠路ノ
ハ分マリ
ヤウニ分マリ
ヤウニ分マリ
一あるセこふ〳〵の
ヨクヘて肩ヨリ
ヤウ打ヲ
あるセ〳〵ヨリ
一たて上の弱あるセ
ハ方の順を川下ヨリ

手ばかりも用ひして相手の心を
そなへよりて口を地へ付声をかけ地の
下へ弩の引くに振よう急をかける時
弱き上に水付くこと成のしに極のき
りうをかねかして奮をあるせ也
しかし敵の弱をあ所潜ませおれ
きりかあるせりの所を居心持こうの
きへ振用ひめし

奮の四つへの大事の志うけ方
くくあるへきを居居弱かしてこの此奮い
伝法の志に明かしおれ分居をとうり

つきこの方に奮の四つ分えんみを気
力を知ることうくきをあるまりふへ
きんを持要をかくしも弱四つくの
志をを知ることして武士奮をこのし
武奮の志をを引きをの故奮也
出来つくまをかるあるかくし外一方
奮のかよくるに思入源を同の志
を見えをの見て解りのをも能
見えて大形をこれ遣をこ振解
の解の一方くまを事
奮のよう志をの同又也をを出同吉

悪の毒の心の入れ様によりて毒の
病を用の用をあからに分けやうよりて
りしるべき考てるをえて俄毒
の毒用ひるを病をこの考と呂人この
有りしと又もしと出る毒を用のるの思
用るよりあてれをいのをとをとへ
悪敵ふり細くまる毒に必もし出来る
心必一とを病を用をとさ一段うえい
者を丸毒と体象指を能えてつえ
ア人指形要し毒所の毒に使毒
所の毒を使人指るを丸傳方病

分一口入の始く

一

まくもをうくまゆうを病をつく
中ふとを表有たくを大小の毒
に所く解を用めて解を相丸解の始
の用小解かを解式い和解のの血の解
をるを解くを解必指し二口を多三口
いをくるくるの表傳をかくを指くを
け始めをを考の引るを有る毒小を解か
さををくるを解一日指小解うを解か
きて考をを和るを小かを考けの使
毒を毒を考に所ををを始めるる

めこのかく

一 鷹をそだてしやうかいろ/\ある中に事あり
見立鷹のこふしやてハ鷹を能かりしかり
て相合せハ/\て鳥をかけ地にし或ハ鷹を
おひきりるやきする鷹丸むしのせた日同
志うけ拓ハ大鷹みハ雀ニろにふ洗し
て粉麦餌を飼て家鶏丸日にふつかさ
併の餌をおしえしハ出丹同志ら鳥に
合せてこの様く又次ん日中七日て通小鷹
のむしやしふりこうし丸りしをま天に飼
雀あわ平日やそ丸飼て其餌虫らかとを
しかた同しら小中鳥小合へし見立熱
拓丸志ろしそる鷹にモかそし餘への志ろ
けよこの有しや

一 若日沢ゝ気よ鳥丸同の志しをみて古傳ニ
支ハそ鳥よかしろもいし小餌を飼て相
多へむし様を及る時餌の餌を一とし
ちおさんしても様の虫ても可ゝ気の口ハ公お
小鳥ても丸志しとこの心日又餌の餌を一二
度もそしても後様虫るハ河系気口ハる
小鳥丸志ろに一有しと一ハ同様とやハ
并一ノ地なちの事并二ハ之日様らんの

息合の事ハ地まハりの様ハゆ中ておさ
めたにしをもいしほと也ひかねされ
の息合といふ事ハさこそへゆひあて見
見候ハ木鷹元鷹ハ人の様同事ミてゆき
わき能程ニ見様のせるとや古き爰より始
しくまて見たる様ハたゝへ古盡餌なとも
なし通ニ尚候ぬりて餌の様見え此
日の為取不と知事秘傳の相傳に有
こと也

一 あらくせの鷹心得るとや相傳有るを
一ツ二ツハ能見して以後一分ゝるに君入
無し鷹みすして鷹の志うけハ餌てつよく
あまり一牧志てに如強小志てを引まてを
以後雉二ツほと餌を飼うけや也一牧志て
ときゝ鷹の志ハをふさすんて此色ニ
して一志よも志ものよる程と志てハを引
おとしハ事ニ甚以能ニ雉二ツ分と飼
然ハ肥大ニてもかこたままても
小さいる小餌ニ仕候ぬる湯ニて一二
度ん洗て蓋ニ入ハ間ニ雉ハ弐ツほと飼
然ゝく餌を取の肉小をしてらい
こりしいうゆを 別ニ餌雉ニても弱ほと

何つるを亟ぶ天下をあ合をと何
者なるか君人とする象指者をと生るの
四の大事の口解を何て紙幡をもけ
元を能世界合元何〳〵元志〳〵と
とる者を者〳〵志うけ四象をる〳〵きと
武人と口示をと者示を示して元何れ
傳を古人を者〳〵と〳〵と新い解の
志うけ人を力を人者をとる事非一
の人猶こて二の者〳〵をと〳〵口示〳〵口示
い者の〳〵の者あ示を忘れて後世の商者と
必事多〳〵後世を示〳〵を示〳〵口示

一

東小出志る〳〵卜四やを
世〳〵世〳〵の者ふ〳〵やより世〳〵〳〵凡
の〳〵ぶか元先〳〵をやつるを亟
あふ〳〵〳〵をぬ〳〵〳〵あふ〳〵〳〵ぬ解
の解抵小島の皮をむあふ〳〵けるをや〳〵
よ〳〵て貴古小名を百〳〵ませ三三百
ん名小〳〵洗日〳〵名者よ何〳〵大者る
ら志名解を雅二口ふ二の何兄者よを
一つを何〳〵あふ〳〵志あるらよ者百や
小〳〵を文を二梅〳〵よてを梅よあより弐
を志〳〵をを〳〵せ名小をる者よ二百ふを

かこ乃あるよ洗毋を用ゐ毋かさるとも用てあぶらぬぐらぬぐ毋を用ゐてをなを出すをもるを用ゐて毋をのこす用

一少々の高より高の所へとんだ人間の所へ行くとあとへ引あとへ引て行事高大形高あし能るつゝ用ゐ毋を能つゝ用ゐて口尾をうつして出おうとにゝとめて毋を用ゐて引て出るもあるゝ高のゝ用ゐ毋をゝ

て持が定まりうゝ羽先ゝ事多ゝ少々出の二日程一日程おかゝより毋を相高をゝ

一ゝ高やゝ心持高に大形に用ゐる也

一ゝ高つゝ心持高を用ゐ事急変洗毋つゝ洗毋ゝ毋をゝ毋けゝ水をゝ毋を用ゐて高の高ゝあてゝ高つけゝ持ゝ

一ゝ高ゝ暗ゝ少々高ゝ高ゝ高を少々出ゝ大高ゝ高けゝ用ゐゝ力ゝ洗毋ゝ毋ゝ少ゝ高ゝに高ゝ弱ゝ高を一口

中死角へうちたひたる鷺屋のごとにゆゑ也
のとり角よりうちをとせく形らん指形
要こ

一 凡そうまの成れかたを出江戸用書

一 あるをへこゝの心指お傳ゑ者ゑ者一
足波道ふる事者二足波のゆゑの支
者こ引てひさる心指こ足波とゆゑ
こゝ指こさきかゝるよをゆるこゝ
うかゝの足波をうふうふの足波なる
こゝゆゑおぶをゆくゆゑて用こゝ鷺
の者ゑよをゆる指をゑゝ足波

道こをうふうくに者こゝ又鷺の踏
つけをあ足ゑかゝ回こゝゆゑつあゆを
のこあゝかゝこのゆをうゆゑ鷺の羽ゑこ
中をかまひゑかゝあるひいをこ引をゝあるひい
をうくゝ記こあひゆゑ遣こてかゝ
足波ゆゑうゆゑ羽ゑくゝゆる向かゝ
ようゆをうこをこふゝをうくふゝて
こゝ指ゑ記を尾ゝかる指ゆゑかこのつ
つあひのこくゝる者ふこゝ指をつまて
こくゝこをる向者の羽たるこをふゝ
主海うゝ向こ我指を下ゝ右つこゝ指

よかをとけ引かをとへ引てひきさる
おぶ〳〵ゝゝなあるゆ音のとゝゆる間ゝを
ゆるさをへ〳〵こふ〳〵ゝゝゝゝ強よ大
音ゝゝゆゆさゆゆい羽をゝゝ羽おゝゝさ故
引をへ〳〵ゝゝかゝゝ〳〵ゝゝゝあゝゝゝを
ゆ音よゝいゝゝゝゝ〳〵ゝゝゝよゝゝゝあよを
ゝゝ経故ゝをゝゆゆ間こふ〳〵を中〳〵
てゝゝさ出〳〵ほこゝゝじゝゆゝゝゝに音
次第ゆをへふ〳〵ゝゝるゝ強ゝゝゝを引ゝ
のこゆ〳〵を音に初をへゝゝ音ゆあ
ゆ飛ゝゝさ意義事おゝ〳〵ゝゝ大音をゆ音をゝ強

一

をへこゆ〳〵ゆ大
かゝるおをゝ事
第音〳〵ゆ作ゝゝゝ間ゝの事ゝゝゝ色の間
をかこの下ゆゝゝゝゝゝをゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝを教ゝを本ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
細〳〵よ九音ゝゝ間ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
を音ゆをゆ〳〵てこゝ間ゝゝゝゝゝゝゝゝ
を細〳〵ゆ間ゝゝ体音のひゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゆゆゝゝ間ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
音ゆ間ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
間を間ゝをへゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

をしめこ者をへる羽をせゝいあしこを茶
壺の口へ合行事要る一二ずゝい壺を人のもと
さゝゝぐる振をれ九あつゝ専要こゝ

一三箭ヶ出ゝ瓦箭元を向かやの
内をあいかこをして壺をへ用立向うや
の内を大れをうゝと元まゝる向らゝるの
をうゝをいうゝをちいさゝ小壺の羽をぬき
うやのゝらゝへ入ゝせようぶや

一瓦羽をきをうゝある向らかやをうゝ
少やをつるゝ向ほこをしらへ
つるゝかこほこの治先を縄
をゝあゝへやつまゝて下へ石をおもつる
わゝをさけこのゝをふゝつゝさるれる不こを
ちしらゝへゝるゝ中や

一をへ立振ゝる先壺をふやてゝをゝ白
水をぬ湯をゝ壺を強法ゝ少や
をて不さをあををゝてをへ表面
少あて鉢をへ水をあのゝいよう赤ゝ
ゝをへて少やのゝらをて平鉢を用あ
しかゝたけ少ゝ細ゝこゝへ亜あけ
て羽力を出ゝ出ゝ羽ゝをゝるゝをへ
立ゝや出ゝ壺羽を小ゝを用やゝる

の、ケ水も色きるまでよいうしのるゆてもあ
るせ九月ヨリ柳ゆ第壹いあるゆるさ小
少く紙いんのるのこと歳ゆの小下ゑあ
ちつるゆを忘うるさ故又ケセも引うさる
柳よ小指行ゑこと大壹も小壹も第
壹さ〻ゆるて志うけ柳も用めるもてく

多 オイハイ

大製配

餅のいろうり柳う事

肉ノワラカナル方ニテメ
肉ノコハキ方板目

一大さいろい餅ゑまさめ小ろてて二月元
切うけ洗餅こ湯加減前よもてゆ
一小さいろい餅まさめよつうてて二月元
かけ洗餅湯加減ゆるもてゆ
名こ色のつう柳の餅ゑ者とあつる尚か
ゆ九月ヨ餅ゆ

一むし餅こ白ゑ小ひ〻めよ落くほう
て入ぐるあ〻めゆ用こ此餅い壹の者
引るる尚用あるる餅ゆ

一柳餅い柳の花のこ〻落くほう初い
いゑ小ゆめるさ湯ゑ〻ゑ後よさゆ
湯のかん呂ゑ花ゆ加減少く洗用て
是も壹の者あるて卜餅こ

一ゑ卜餅い花のこ〻小餅をつう白水

水をこゝろみ流流を少後ぬるを湯小
て一通洗用鉢こゝ此鉢に蓋のゝうちか
しゝを羽力ゝ力ゝて去ていなか
かゝちへゝする蓋小用へ

一 さゞゝ鉢元用の同ゝの道具を用
箱を刀用ゝ切ゝて水をあだ
ふゝゝめゝ無ゝ水をまぜ鉢ゝを用
蓋のゝ能元ゝる同元箱鉢の用れめへ

一 かゝゝ鉢蓋ゝ板めゝつゝてを鉢を
かゝねあけゝまゝめゝるゝてゝ用ゝ洗鉢
ゝゝる蓋小元九用同沖一の用鉢也

一 たゝゝゝ鉢ゝの蓋小蓋ゝゝ用ゝゝるゝ
ませ大きゝつゝてゝ洗て用ゝ蓋ゝ九用同
丁用鉢也

一 かゝて鉢を蓋ゝゝてゝ大ゝてゝのまゝめ板
同一也ゝゝ小ゝ無ゝ板ゝ板ゝゝ用ゝ也
を洗鉢ゝてゝ無ゝゝ使ゝゝる蓋ゝゝ
ゝ用ゝゝ鉢也

ゝゝゝ外色ゝ鉢の板ゝゝ板有ゝゝゝ
ゝゝ此九ゝ蓋の外蓋の去ゝゝ持い
鉢のゝゝ板無ゝゝゝ其外ゝ元の蓋
小ゝ同鉢の板ゝゝ板の用蓋ゝゝ也

一 口餌并丸飼拾ふ事

一 大鷹の口餌雁七ツの口餌ハ鷹ニ雁九ツ
の口餌隼鷹に雁十一の口餌飼拾口傳ニ大
形大鷹ニ于一日ニ 但鷹の口餌積合七ツ
可成鶻鷹小鷹一日ニ口餌積合少鷹の
方ニ雁九ツの積可成隼鷹ニ于一日ニ
口餌積合雁十一可成ためし有り口餌
ハ丸飼ニ餌積ハ大ふくり程可成秘傳
其上隼鷹の口餌ハ方ニ水ニて洗飼ニ

一 取飼拾ふニハ肩より上大鷹ハふくの道ニ
方大ニ雁三ツより多丸飼ハくふと餌
をおさせて飼ふけ餌を飼ふなし 但七ツ関ふ
より末の丸飼ハ鷹の肉よりふくの反異
丸飼ハかね下の背の力この鷹の方ニ鷹
の志くあハよりふと無餌積をして
取飼して宿ハ戻飼無ふ下拾よ六七ニて

一 二月の之鴨三月ニ月のふとかり寸反の
肉の鷹の小ハ小刀を鳥の根より下ハつミ
ぬきおすふかとぬく血を洗ひ水を無
ぬく血を洗ひの反をまるこそハ二色
まて丸飼中也

一 定餌かふ餌小飼同積りの事 大鷹ニ

雉七つ兄弟なる雉あり
のうちに雉二つ大形此餅つくりうち何者
の餅猿と此餅猿とにて作る者の肉ひ
ける者と一方餅之餅乃至通ル何
ものなりしせ玉へと者の色とよく似ル出
者よりて餅猿餅うの大小てきてし
うち餅ハ何ものなる者の象さ
ちうより餅ハ何を何ハ一切餅ハ何
ゆ不ル乃おの傳ふ物也

おうしまうの事
ふ八草事
おかしまうの事

おうしまうの一方

おハ草 馬鹿形おまして餅ハ色何ハ
四月一日

去竜 ちひるの柳まして
ふくろ角 みつくの臭馬也
ゆきねつこの馬やうきんち
人参 甘草

右八色を粉末にして赤小豆屋煎うて
大豆黄耳かき小豆ともに丹砂
小色細末にして
たりくるりや程をもつて服す一方
かのもしの角粉末にして一盃ばかり
細末にして
同一方
ちがやの根　あいぐさの根
右二味をもつて煎汁にして飲む
同一方
茯苓
人参
甘草
右四味を粉末にして赤小豆乾煎
小色細末
くくり茶一方
かきもしの蔕のひざのふしを去の中仮ようこ

七日計して取上て扱ひ三十而程と
小丸して
ゑさしいの黒焼
右二色を細末して水にて米合餌ニ色付
遣し

同一方

去亀 黒焼　狐の頭 黒焼
右二色を水にて米合餌ニ色可付

同一方

五八草　ふくろ角
右二色を水にて米合能ニして餌ニ色付
へしかし通たり薬まへし薬くさ薬
このかみにて有しとゝへ大塊あたり
薬にて鷹をとつきへかゝりまなし薬
少くらをぬくへうしろ丸志て薬を
鷹かけ候くゝ薬にて丸餌ニ申まて
かね飼さけをハ鷹を仕ヤ心懸第一の上
候や

隼鷹　鳥つきを仕る事

一　荒鷹の上やふさいハ乳付の若竹成婦ハ放
右ゝざり〆にかして日ころハの下に遠く
石をほりおはしをうけて〆この振の鳥遠

きあるつかことをちらへ人の切角る法
小鉢のうつがこちらへて毒をつゐに
毒ほとほをに口解を何〳〵

一 かこほけの口解小つきゝ角まをとをの
肉をとへゐつきて口解を細〳〵角口解の
ほりゝい毒の肉小大小接りて角
和羽をへ卯の刻よりの辰刻のゐるとこ
ろ小をへ也かこへつゐゝ角ゐゝ小ほに
口解を角〳〵

一 毒ゐつきて口解小をかゝをゝ大ざいて
解は鬼ウワキ大小を形りて血けのゐ流
ゐて血の口解をゝ一度ゐゝ解汁を
ゐ角ゐゝゐあてを毒ほりゝ角ゐゝ
毒ほりゝ口解小角ゐゝ和ゐ縄をさゝ初ゐゐ
ゐゝ毒を地へ記初ゐだゝ毒地小ほゐて
いゝ肉ほゐゝ毒九〳〵二度目小解又地
へ記初ゐをゝ毒角〳〵ゐゝ
ゐゝほゐゝ毒をゝゝゐて流解をこゐ
ゐ書を小角ゝ和ゐ肉ゐゝ弱をゝ
いゝゐの鳥小をゝ也をゝ揺九ゝ
小角て肉の口をこゐめゝ血ゐの牙を地
さ九てふゝ落ゐて水を魚流ゐて毒

六月十日雪の肉ぶよう丸雪の筆さ
しぶよう餅をを取用〳〵
一 三次の殿様御子様に世〳〵〳〵雪ふて
きいつまこの雪ふて世雪ふて乃あ面〳〵
天せうけ雪乃〳〵かゝいてまゝ〳〵まり〳〵形変
雪の口餅をゆくゝ雪せて丸雪ふて乃けまり〳〵
場のよに沉ふて合九用〳〵丸雪れし
きう丸〳〵まゝ〳〵戻〳〵洗餅を
雀三日用〳〵餅世鳥ふ合せ
りゝ三丸丸雪雪雪を丸かゝる事ふ〳〵
引上まわりをいつしの雪ふて丸用〳〵

引上丸〳〵いかゝまる沉〳〵如ふゝ引上
丸ゝを雀二日用ゝ丸用ゝて雪用〳〵戻を
ゝ〳〵系紙用〳〵

きゝ〳〵系一京

五八草　五つを切用
かの志〳〵の角
名三系を形中〳〵て中〳〵少合世殘乃〳〵餅
ふ五色月世色て雪を雪をふせきねるかけ口を
きう餅をかゝる以雪ふて餅〳〵抓る餅
の系を用〳〵抓雪をおこして乃こ示つ
ゆ月一用ふ世て餅を用〳〵餅ふい鳥

鶏ぶつ切にして酒と醤油
で煮る水を酒付る
ゆきの白ゆき胡麻かけ雑こ
一そぼろ日蔭鳥に合せ丸胡椒
又煮るにおもひつきざら胡麻
この用

くこ茶一斗
椒のめけかし　却んぞやく石
五八草
名茶味を細末して
こ酒に胡麻

一雉鶏の肉いとぐいきてきれ傳こ大ぐいきて
こいひかのさんの肉船貝のはんのまるこの
やしかしてこきの赤ひけめ茶花水
てきこもい上の赤こんにゐてこらをがい
ぶんめ一一拵白唐のいのふこをも焼
を度こる故こいきこかのんをふ亜
て恵こいこるこ一形度赤をもつよく
きこけて又ゆるに胡ゆ、うゆ屋こうゆ
赤こんるこ恵のんこ拵こここに度こく
こ赤こけこ赤こや
一厚葛ぶ赤こけ少胡百こ拵こ百こや

一 三の組四の組五の組六の組七の組緒にてもを
しくゝ茶有しもと之へたらはおゝふ
つかれ

一 あけ鷹の志るけは大く彼鷹の肉よりか
こゝろ志てをかう上くしてさゝやかにきん餌つ
るきよ垂らんゝをとゝめよ海河の上に餌
を飼捕りして鷹に庭とのいわを出
させ行て川の向に垂て据まうて小
鶴まても竿の先にゆひ付てふりたるを
よひより候付鷹後ろはなれてふりたるを
川の中へあけたてゝへて鷹かゝる所横
へさりてゐへ飛ゆ肉文ふりたるを水の中
よりてゝ鷹にこゝせてまて又鷹飛海りく
肉文ふりへふりたるをとゝのこゝ二三度も餌
志りけて鷹をかけらせるへしせさせ後
彼のふりたるに生たる所ゝをゆあて九州之

一 面し通りにふりて鳥に川まて掛けるへしせ
こゝ後鷹の肉と鵜かまりあらは付川の
岸合十丈も遠くあるを垂鷹をとりへか
けさせ物ふりたるを捕てもけ九河のさと
へこいよりゆきて川ゆるのある上
の庭中にふりとりをとりて鷹をとよみ

丸没ふ〳〵るを神の下へとやく流し〳〵
へて鳥と〳〵かりあうふをとりて鳥の
鶴の川の鳥の名なる方の順をて鳥かり
あり河原川の鳥を多を為て鳥
よもう為させ鶴川の水を雑まして
成るよと〳〵又いやもてもつきれ
て鳥に九角の河を鶴の羽をひて角
ゆ〳〵鳥小九角〳〵あけ鳥のるい
鳥の肉あひよもう〳〵せををつるぬい
日照の川のと〳〵赤傳をて鳥のこと
をもちへる河洗角をつよ〳〵洗て大角
よ角〳〵をぬ〳〵〳〵鳥のこい〳〵引る角
い角かさを次角〳〵をる〳〵角ねをとし
鳥のこるをかけ〳〵に式い鶴を一あてな
てこをあ〳〵ふこいい肉よをこて角
色こあけ鳥よい羽てをる〳〵ふ〳〵書
傳ゆをやふかこ〳〵

一

鶴鳥荒鳥ゆつあれこゆ

一

鶴鳥こう小鳥ゆ小一をくこふ〳〵の鳥
行角こ二のこてよう引ま〳〵編ゆこ
ぶ〳〵引上い心ねこ下へこぐ〳〵こう〳〵
鳥只羽をこ〳〵の河極ゆふこむひて

まくらもとにてもてあそぶ
べからざるものなり
ゆえにこれをもてあそ
ぶものは童子（わらこへ）とこれをいふ
なり
一　鶯のよきあしきあるべし大鶯の目
のくらいろのあかきはよし
刑先垂涙（けいせんすいるい）を強させて和少るなり
鶯よりも九月中旬
一　鶯よりも赤の鶯は垂涙強涙なれ
ども赤い心なれ所望あるを
鶯にあてるなり
よ解り鶯よりも垂涙せさせや
又赤のようにてもてあそぶ
ものなり
さて先鶯にあ
ぶらひさたぶるいろ
させ方いろいろ
つくろい様目ろ
鶯にあてるなり
鶯にあてるなり
解とるものなり
体メふり水ろ鶯
うるこうるよ
い鶯をもやく垂
引鶯しい

身さき床のうちに居させて鷹の器くみより
渡り出来ぬ事有べし
一 鶉あはせ候時犬につきやうは犬より一番に
取につき犬より前中にて次第へさがりつき
てかるの立眼付にて立ちかへりき候ゆ
うかゞひ候て鷹をも犬へ犬に付まいり的
鶉立てより二のしてより出ふしさ
さまくにまて合せ候はんをとるの
方へつきまはれ候にて合やう
く犬の頭（カシラ）をさゝへ犬も必ずふしより
鷹のをとく合は同じもの也
一 鶉くしひ合時は鶉のおちをみ中水して
ふせを見次第にまわせてひつめ遣りやうく
目付は右同前小一ちぎしく
一 初りの天薩伏ある口小走りの口餌のお
傳ちく犬方の薩にて丸い口目の天
薩の付次の毛をもさ次を引きのふ
を肌のよそのを付やしてある毛をかいさ
るやしふくひの頂を初を出恐付やし口
餌の付は新の口餌を鷹の肉より
之餌かくの様りに付恐やしてあるをか
けやつし出肉並付取て小やへつかり

一 毋小水をつきて角豆にてすくし
尾をとさしたる鳥の糞をすくい
大鳥の糞をさして目の内黒目かい
小さしめをてひきくいの毛をとすくへ
悪く絞ふり細くいしに角豆をとはし
このおくし又荒鳥小てをとすくに
きりやうりの羽ふるうの御傳をとる
追てこまくる節小追切りくい鳥
の右うりて尾をとすくをとりやと
まりの秘傳とも申伝目の
らかけやうかしてかくいの毛りを

切野芋 キリヤトニリ
追切ノニトニルリ
言

鳥の毛にかくるをとり尾をとすくを
ト事行あや

一 きくあるくせの鳥ふるせの鳥仮ふ
をとは角いは木へあるる鳥いは木の鳥の遠く
はは小角くるふ合角追切鳥かう
くといふは角尾をとやくに地へ引をとは
垂角よりさ口毋小くよりうの口毋をたは
くくくくせ鳥の鳥水ふるるやくし
て鳥をとくくくと体仮るをとは心持鳥あ
ひ事

一 鳥くせの鳥口ふかくくせ仮るをとは事不

ちらかしともなく候ハヽそのまゝにて
又網にてとらへ鳩の羽をちらして而後
なをさし木の上に居させてとらせ小
鳥を合せ鷹を休め餌を飼て鷹次第小鳥を
後年やり君持まいらせてへて鷹下へ休
ませ餌に又追立て鷹の息をとらせて
預まいらせ揃挽へとりて餌よりして口餌
ゆるく鷹を丸口餌をたべさせて飼
ひにハつかみさせ鷹を休めて候事を
心持肝要也

一 執し鷹をとやしよりさせてハ秘傳有之丸飼
にて餌初いろ鳥の後ともに分け給ふ餌ハ丸飼にて
飼ハ小ぬく血あつて鳥の毛を取めて飼ふへ
しや鶉をハ糸のしいる肉付ともに一ツ二ツへて
かるくにうちかけをやしきあつくかんの小鳥
こしらへの定餌飼同しも心得へきしや
其の大鷹をもちいる鷹をとり鶉をあげざる
小鳥にも口餌を飼かけるよう合せてへて鷹
の糸さしさへをもして後は必ふくりとや
病ハむすの小もたてしい

一 鶉鷹の巣鷹ハ鳩たてし籠丸飼の心得大
鷹に同しおなしもちてし

一大腐鶏腐ハ上に出る腐の上腐のくつ
ろきさるゝ所あり薄き上腐ぬけさる
腐ハ鶏ハ腐ハ腐より小さく尤に
こゝ腐とおもふ所ハ腐とかゝてもつの
腐ハ又豆腐と云あむふ分指二つ中く
をしゝる所力をふ腐の腐かゝむ腐い
くい腐くつろきさるゝ心臓一ちゝ玄い
かろ色をゝ又ハ腐ゝ腐ゝ腐ゝ腐ゝ腐
の羽と羽ハ腐腐骨より骨又ハ骨毛ッ
細ゝ入ゝ腐ゝ腐ゝ腐ゝ腐ゝ腐ゝ腐
ハ大腐ぬけさる腐ハ腐ゝ腐ゝ腐ゝ腐

ゝ腐ゝ腐ゝ腐ゝ腐ゝ腐ゝ腐ゝ腐ゝ腐
ゝ腐ゝ腐ゝ腐ゝ腐ゝ腐ゝ腐ゝ腐ゝ腐
ゝ腐ゝ腐ゝ腐ゝ腐ゝ腐ゝ腐ゝ腐ゝ腐

一鶏腐ハ大腐ゝ腐ゝ腐ゝ腐ゝ腐ゝ腐
ゝ腐ゝ腐ゝ腐ゝ腐ゝ腐ゝ腐ゝ腐ゝ腐
一所肉ハ腐ハ腐ハ腐ハ腐ハ腐ハ腐
ハ腐ハ腐ハ腐ハ腐ハ腐ハ腐ハ腐ハ腐
ハ腐ハ腐ハ腐ハ腐ハ腐ハ腐ハ腐ハ腐
ハ腐ハ腐ハ腐ハ腐ハ腐ハ腐ハ腐ハ腐

一荒腐ハ腐ハ腐ハ腐ハ腐ハ腐ハ腐ハ腐
ハ腐ハ腐ハ腐ハ腐ハ腐ハ腐ハ腐ハ腐
腐の腐ハ腐ハ腐ハ腐ハ腐ハ腐ハ腐ハ腐
ハ腐ハ腐ハ腐ハ腐ハ腐ハ腐ハ腐ハ腐
ハ腐ハ腐ハ腐ハ腐ハ腐ハ腐ハ腐ハ腐

世ニ為ハ荒井市郎兵衛と申者ニ
秘傳ニ出申候間依而證
写進ス之以此ニ為ハ

正保二年丙ノ
八月吉日

病鷹藥飼書

第一　病鷹脈之事
第二　ごとけ病鷹こと事
第三　餌遠病鷹こと事
第四　あひ息病鷹之事
第五　こらいたけ病鷹こと事
第六　ふるけ病鷹こと事
第七　こせの病鷹こと事
第八　こやの風の病鷹こと事
第九　毛かり病鷹こと事
第十　羽こと羽こと病鷹こと事
第十一　口熱の病鷹こと事

第十二　鼻けの病鷹こと事
第十三　目の病鷹こと事
第十四　鷹疵ありこと事
第十五　血脇病鷹こと事
第十六　骨つぎの事
第十七　こうせの病鷹こと事
第十八　足けの病鷹こと事
第十九　餌こと餌おし病鷹こと事
第二十　たきこと病鷹こと事
第十一　尿小血を付病鷹こと事
第十二　ふんぐすり病鷹こと事
第十三　泡吹こと病鷹こと事
第十四　ふくこと病鷹こと事
第十五　かくこさんまいの事
第十六　ごたま病鷹こと事
第十七　（鷹の肉あるのあること色と
　　ぶくこと付ワホこと事

△第一病聾脈之事

一聾の脈いとる脉表脉たゝ古脉有

一とる脉まゝ目の内淡くて河くゝ下まぶらの
皮を目へ負ふ聾い必悪生少し可知

一しもいろをとゝ牙のゝもをとゝ差より後よりく
※聾い大抵いでゝけの病聾一と知

一くらかゝらみゝもとゝくらの色ゝまつくらかゝら
小ゝくゝい熱くまゝくらるゝ口いをとゝ白くら
かゝまつゝとかの抜まゝくゝいでゝけふくゝと
の病聾く

名と色をとりる脉やゝ立病※聾のくらい

しかしかある白くしきへてはきや
なり
一 元脈ハしかれいをさらへあるまでの内へ
かゝちとこふるしかれいは深の病あり又
上せんへしかとかりよせいみやうのそこの病
みやうへしかとかれよせいは先づそとを病
しるなあてしざるれはしかを指むこしか
これ有くはきは九分そこけの病
鷹のしかしと云病を大鷹のしかいかハ寸
先まいかしかしかしらしいハいしやし
一 ろ寸を指りてハ元気なるよ餌をも飼以あまよ
大鷹ハふ中羽をそずあくおよ有し餌を
飼く後かろ寸廣くあくおも鷂鷹より
末の鷹を拵以て見て少し死あくおこ
少しろ寸ハ無病なる鷹のろ寸こし病鷹
のろ寸いせしと病或いせしけの鷹ハ餌を
ふ飼以あまよ又餌を飼てよ出すハすくい
つむるおこそしふかをへおおかとも有し鷹
いろ寸かたに許しくこのや
一 ひか掛さハ指りて元気なるよ無病大鷹
の大鷹ハ脈息の数への五そしの様の数をと
用ゐあこ鷂鷹より末ハ拵へいまうそやし

病鷹は息合一ぞくと二ぞくと持息より
いさゝか指にこたへびの縁さゝかかしたいのち
のしごとも息合見およそやさい病鷹の
息の脈にかよふものをあらはしすは大形て
け撰病とへ相違なきや
右三脈は九孫にはいる脈承脈合六孫の
的脈と病鷹の孫経にくはへこれをしる持
第一専要なるべしや

△第二ごく病鷹の事

一 ごくけ病鷹りんれいこずくいつめてくら
すかさけて持出し餌をしこのひろくら
かしら見かくしまでてうへたけ縁く
よつ毛をぞ鷹かのしつむしてかくなりこふ
あるべし

△脾胃散きつけ療一方

○人参 三銭
○つやしかし 皮切去油ノふ付メいりあげて
○甘草
○檳榔子 三銭
○ふくろ角 半銭
○沈香
○茯苓 右三味ハ五銭
○かう朴 右二味ハ弐銭
○三ツ葉さしの葉 一銭 用ゆ

右九味を細末してよしかいの身かけ大鷹く
ふんまくは鷂鷹にはかるくすこし餌ふ包

不食、諸病を大抵妙薬也。

△日一方

○人参　○てうこう　馬焼

○沉香　○大かのかく　陰干

○ちもやかく　馬焼　○ちもやかく

○甘草

右七味を細末にして赤ごま合ワせ通

毎日ひとつ食ス

△日一方

○てうこう　炒

右二味を毎日ひとつ水より出し毎汁

小ひけてこの食白ワ系ごとけのお茶

也飲る水も日おとよ不食

△人参散日一方

○人参一両　○沉香三朱

○松柳子一歩　○てうこうきつ一歩

○甘草一歩二朱　○くるつろこん二朱

○ふとう馬焼二歩　○玄竜馬焼一歩

○五ハ草三朱　○ほていてんうい一朱人参舎利加つてこ古キリ之ノ水ヨ百日さらし

○かくかく一歩　○大黄八一歩

○ちもやこつ一朱　○ちもやかく朱中

○ちもやふ朱中　○こ小かく一朱　脱けるこ古と流用して

○こたん 朱中 [illegible]
○銅ノせんこう 朱中
○きいきんろ 一朱
○金薄 十枚
右丹味を細末にし、蜜にて練り合、何角の
雁の胸に塗り、弱火にて焼、
雁の油よりとぶ白粉末にて
くり返し、毎汁をかけ
を丸に焼をかけ、の末を
入ぶしあり中に流入て角状一いどけの
如末又は清酒にて如妙末にて
焼を合せ丸り末や
ぬりとくるしに焼つまりは対象分

△氣付薬一方

○人参 三匁
○沉香 三匁
○ちんこん血 二朱
○丸竜 焼一匁
○ちんこんぬけがら 焼一匁
○巴豆の皮 焼一朱
○こちつ 二匁
○くろつろこん 二朱
○ちゃかし 一朱
○ちゃのこのふ 朱中 焼
○甘草 三匁
○反子のかいこの蝶 焼一両
○立ハ 三匁
○ふしかしす 焼土用ニ白粉
焼ニ二匁
○みそ麻の焼 一朱
○ちんこん 二朱
○かつら 一匁
○大黄 一匁
○ちゃのこのふ 一朱
○こ水 朱中 焼

○こたん 朱中 ○ちいさんろ 二朱
名共二味を細末にし蜜丸にして合薬と
をふせロをとりて併の末を大豆程入て
水にて流入用べし急つまりて人の指
の血にて出しつれば用ひ其一の薬の
煎汁にて出し又薬よりしたがきの
出又あもりの此三病ともに効験あり
△ごしけ末一方
一ツ煎るの法 ○ちやこの
村草 ○沉香
人参 ○牌のゆけり

一ツ煎ふ名ヒル モトモ云 又ヒルコ ロトモ云

○あかり病のちんこう
ちいさき味細末にし合大薬中にかい
かいの耳かきにあまきくい弱薬中にこを
くい併よ色用べし一カ月あの末六方
分ほ色こ方組法有こ此末丸ら
効験よきこと
△牙之併遠病薬こと事
一併遠又ハ白い薬の部脂たる松ヤにて
小き部小ヒルてこ白いヒルこ
の小指ヒ黒こ黒このかいよつ式い薬の
息こさこ式い口ちの水にてこ又海よと

くるる角角にて用ゆる事也

△何遠第一一方

○麻の子黄芪湯 ○金薄 十枚

右二味を大麻の中に大まめほど細るるまで煎じて茶に九こ宮殿ふくめて口をとうし細る水中に流し込ゆる也

△同一方

○椒柿子 ○鰒の黄芪湯

鰒のさかり黄芪 ○こて茶の茶黄芪湯

右二味水にて煎じ細末に銀屑拾枚合細末にして何れの方同前也

△同一方

○蔔の粉 ○あんこん 沒少去ル

○百草黄芪

右三味を細末にして何遠第一方に合何れも用ゆ

但紅妙第一方にこれなくば人参散の内

第何遠中に出る用ゆ也

△小児あり息病者こと事

一あい息の病者子供のごとくなりて息苦しくいりの計にて指也

こゑひきくるる計にて苦しくる

ちたけちりくらいこ[illegible]

△あひ息ヲ糸一方

○くるこらいの馬焼　○沉香　馬焼

○椒のあけかす　馬焼

ヲ[illegible]ヲ味を細末[illegible]大きあはせる

解よりあつかて九[illegible]大唐中二箱併小色角

[illegible]角唐くるをふせ口ぬりて糸

けを口へ入解よりあ中流の角[illegible]又

人参教ゞけヲ[illegible]一刀也

△水立らいたきの病唐る事

[illegible]

[illegible]

[illegible]

四三味を煎ぶし合先てこの汁
少く流てけつの中へ石菖の根を刻み
まぜけつ道をあらふ後件の草を煎
つを分ヤし

△中六ふるけ病痛こと事

一ふるくふるけ二病のてんらふるく痛の肉
こふくあるけを用て下病して腰脚
ひうをふるけい痛の肉の皮絶て下ふし
こへこ腰引こ二病のてんに病の元根くく
あてふ逆いたりを中ふるすし

らふてらのらひ拾出ぶるけいを
こらかるつさ出ぶ樊病こふるくさこらる
ひうこを病こ

△ふるくてんにかい

○人参散　病ものけの草用て毎かに
ス元何魚こら色採ふをう次第を毎こ
を何けヤこ魚いを（危こふ）
ふるけいを絶計小布を分こ布を面を
をこをの危ふこ合草して水こをこ件
の布にかう痛の肉の皮の絶る布を絶
をこ布を引ぬこ風を元危こ草を

いさゝけの瞬置教り一方

△外ちさせの病毒ゝ事

一こせの根ゝ伝ゝ次のゝ色より病さゝさゝ色
のゝゝゝゝし此根ゝ病ゝ皮ゝのゝ小毒出来
色の根とぬゝるゝゝゝし

△こせの苦一方

○てんもんせゝ　○ひでて　但松の木のやに
名二味を細末ゝ水ゝゝ合先むしの末
をゝゝ茶ゝてゝこけゝ色のゝけゝる
所ゝ能洗てゝゝゝゝ病伴の形
苦を出ゝゝゝゝ　ムロノキと極りハうしこ
リ黄と極りハうしこ

△外ハゝゝや風病毒ゝ事

一ゝゝや風の病毒ハ目のゝゝあ毒ゝゝ浸
ゝゝゝゝゝゝゝゝ身の色を立ゝ寸ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
色ゝゝて毒ふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

△ゝゝや風苦一方

○桃柳子　○ゝゝゝこゝゝの馬焼
○人参　○沉香
○樟のゝけゝゝ馬焼　○甘草

右六味を細末ゝ水ゝゝ合ゝゝゝゝゝの丸
ゝゝ大毒ゝ五ゝゝ　此毒ゝ毒ゝゝゝゝ

解毒色一角

△同 茶

○瞬冒散のごとけ茶この用

△同 茶一方

○白芷 馬鞭

右一味ヲ解ス色ヲ用ル

△同 病毒ヲ用ル薬ヲ茶

○石菖蒲 ○乾ごん ○ちの水

○ちこく ○却んごく ○さぜんこゆ

○川柳 ○茶

○りけの水

右十味ヲ刻み合せんとして石の臼にかけ石の撓にて石菖蒲を
たゝかゝ重て併の薬ヲ和の汁ヲ為て
息のとゝ病毒を用ひてふせてふせぬ毒
なゝ息少くゝ中毒成むまへし
又毒不出ヒせりんの為沢二夫元毒
ゝ

△第九 毛かゝ病毒ゝ事

一毛かゝの病毒ハ毛をうおゝたし又毛
かゝの病毒ハ毛かゝ生ゝ出ル
ゝ三病ゝ毒血ゝ成ル病毒

△毛かに茶一方

○くはのい　○毛おけ一ろい

○ろくろ

ロクロ色を細末にして合てこくの汁
くしにくくるる面のくさをぬき抜
てこそまりの流れ汁にて併の分茶ッ
ゆ〻〻

△四茶一方

○山ゐのかつをぶしの粉末　○ろくろの粉末
右二味を細末にして合併よ色の角
毛かに毛かに二病の白茶かいそけ茶

この丹病又脾胃散を用併ッ粉末にして
用くべし第四に調べ茶湯ゆるめ也

△第十　羽ろろ羽ろろ羽毛病ろろ事

一羽ろろ病二色ろろ打めの羽ろくいろ羽光
まくくの病前をさくるせ肩ろ打めまく
の病をあけ羽ろて抜あけ羽の病ろをろ
かくくさけ羽の病ろるをろ面ろさ

△羽かろ茶一方

○石菖　○ろくけの木

○ゆぞこの木　○ろくろ

○ちゃせん　茶碗

○かしら　瓦の類

○ちゃせんしゅ　茶せんしゅ　おそらくは焼て、
名古屋色をちゃせんと焼て、
こと上にて茶の葉を焼せんしゅ
をちゃわんやかけ　茶とふせ　梅四のこ
とりをつかせんしゅ　小さ小さ　むす
しこ　ちゃかごを紙　ちゃこと　をご
ざるこ　ちゃ色かごの四ちゃ　ちゃ紙よ
ちらし　茶を入　茶の　ちゃさる紙よ
重しし　餅を　何い　餅　意ツ　ちゃ　一
何

△同第一　百

○ちゃこと　ちゃこと

○ちゃこと　ちゃこと

○陽柳

○古梅のかぐし　馬焼

○鎖乃馬焼

名古屋を　深　ちゃ　大名　餅　色　何
見ゆ　茶こ　茶こ　品の　羽ぶし　のこら　馬く
　　意　ちゃ　ちゃ　紙　あ　こ　さる
　　ぶ　沢の　汗　ゆ　血　ち　ち　ゆ
　　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち
　　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち
　　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち
　　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち

△同第一　百

○かぶし　重箱一充

○古梅のかぐし　馬焼

○ちゃせんの剣　ちゃ

右之三味を細末にし水合毎朝一匁

△同 茶一方

○かいこの子 但ちゃのかいこの黒ふ子を射るなり。子ちんけつ

○生地黄

右之三味を細末にし水合毎朝一匁但

かいこの茶にて為し飲まし合茶

して用ひる

△同 茶一方

○人参 大

○甘草 中

○こしきのふし 焼 ○古桶のかぐ 黒焼中

○人の髪ねいの焼 小 ○いのしゝのかぐ 黒焼中

○蛸かしの焼する中 ○然の骨 黒焼小

右八味を細末にし合茶し毎日一匁ふく

ぶくもし一日に赤色七色大変出

て用ひる弱ものこと色用ひて妙茶よりもよし

一羽ちゝの子ねいの羽ちゝ赤ゝ赤ゝ赤るの為

にこれし羽ちゝの肉を黒血を敬る羽のこれ

なしかし羽ちゝもしてして羽妙の肉のこと

ちゝをふねいの羽中の骨にて初

△羽みと茶一方

○ゆつて ○一赤ゝ

○橡木の茶ふ ○こしひこ

○あせかきの染　○あぶら
百五色をおらす少合五匁八黒焼ニメ
細末し羽ちとのたまる羽くらへ貼へ
し光併の下分さる以前る洗下少く
この洗

△洗茶

○ちくつの茶　○石菖
○茶の木　○柳
○ゲけの木
百五色をせんし羽くこを煮をふせく
能洗ちを後よりく分茶起ゆり急

この亜く相相茶をかをへし

△さし茶

○ちんちんせく　○薩の黒焼
百二色茶細末して松の木のやわ子称
と合をまる羽のくらくさしちくく
かくゆりてちんこと上へ銅の火針がめる
めあくめくあてへし

△回茶一方

○黄蘗キワダノ丁　○毛やしろい二朱
百二色を細末メきら文合然のいをちち
羽くちくへぬるへし羽ふしの肉くりよりを

毒虫の羽をとりはづす女の手にて羽をくくり
いかゝ指手をさしこゝに相鍋の湯をくんを
あく〳〵洗手を用て拭こ
一羽虫の入たる中に毒虫くゝりあり〳〵
故に羽くゝりの時分かゝる者ゝ羽くゝりの
し羽みゝと遠くし羽虫に羽ゆ〳〵肉ろ市の
こふ者色る一ちゝゝ

△羽虫薬一方

○たんゝんゝ　○ゆゝゝ
○色ゝゝわい　○朱ゝ
○熊のい

右あか色を水少〳〵ゝゝ羽のくゝ〳〵分毒ゝ

△同薬一方

○かゝゝ者のゝゝ油ゝ　○桔の木のやゝ
右二色を祝り合菖蒲の根をけづりて
併の薬をあり相ゝる羽のろゝ〳〵入
この毒

△同薬一方

○唐胡ナの油　○桔木のやゝ
○熊のい　○色ゝゝわい
右四色を祝り合菖蒲の根をけつゝ併
の薬をあり相ゝる羽くゝ〳〵ゝ入れの

紙の羽くちへ指すを分垂へ
一 尾羽のぬけてあいたる事もそこの密法
小羽のくちのまちと馬ずりとゝゆ疵
肉を切まりて羽のくちはしるるようなる
のくちの上段をけまりて朱ゆく竜のく
ちのもとをそこしに指分ずに友子のかい
子の紙より分るをもおくして下ばし
併し竜のくちの中ゑ入又いくちの上ま
ゆりし併し羽のくちの切まりする穴の
中へさしもこゝしに指ずに指ずのぬけさる
紙より尾羽のくちへ指ずをぬい分一ち
垂ゆくつくしがゆ尾羽ゆりくちい
をいはせ

△同第一方

○生子の三十日より肉の大段り所
○友子のかいを第ちもてけくゆる二羽
のくちへ三ぶの法 ○水かゆ
白三色を指の合斉のゆの板上段を
ちもて併し第ずをぬり羽ぬちゆり法
を切まり併し竜をさし入の垂指
三十日ゆくぬち指しゆらおいゆ
の

△第十一口瘻病毒之事

一口瘻の病毒、併を伺て始ふるを色を
主目の色をあらはし白目のかゆめて息と
やくしてゝ子肉多赤くゝ
ゝらやゝふして あとだらるゝ
つくゝ

△口瘻第一方 口瘻ヤニハリハナタレ

一○こめやゝじん ○苟のこるの中て色を湯煎
右二味を細末くゝ少合毒を加て
口をうつのすゝ口へ吹入也

△目第一方

○茯苓中 ○芹の根ゝる中
○ゝるごゝの黒焼大 ○人参少大
○甘草中 ○こゝらどんあつ大
右六味を刻合雁一つ毛たにゝゝ
かけゝゝる雁のゝゝをぬゝ丸肝ゆ
毒ゝゝのゝゝ丸中ゝゝの目
目中併ゝ六味ゝ合末を雁の後の内
へ雁のゝゝのめかゝ入ゝ丸ゝゝて黒焼
かゝて細末ゝ大毒ゆいゝゝかいの耳
かゝめまゝい鬱毒ゆいゝまゝい併毒

風〳〵
右の黒丸薬を清水の病の如き症に用病者
に白湯毎に小豆大併に茶を
飲るのだ〳〵水にて煮詰て飛石にして
煮て口中へ含
み少〳〵流風に命門を
くさして二灸を一のさしけかい
二所の灸所は茶の末の茶の中くらと
ふるせ木の切口とあつ灸少〳〵あつしめ
人の刃〳〵あつくあつさ呂くか
しあつしめし加こ所へいだん灸あ
なかもとかもくあかし

△第十二鼻病痛之事

一鼻けの出の痛い鼻息のまるまるくしく
らくちらくひのまりふくまてくしたくび
ていくる息ふさうかりて口をあけ又口中
のくもあと種々くものも

△鼻けに茶一方

茶の服へ古紙を入てくゝ砂かまをぬけて湯を
せ〳〵内石菖の根
※根少〳〵茶〳〵出と砂を併く〳〵根へ煎りて
鼻穴より口のくもあこの鼻のまくへ引こを

口のうちをあこの
（元）ゝ　石菖の根をたたしりぞく
ゝあごへ脇ゝ　銅のめかねをあらし

△同　すり一方

○丁子
石二色を細末し　すり少合酒のまし
くをけまして　鼻のすへ　併のすを吹入す
亟

△同　すり一方

○檳のめかね焼大　○沉香　中
○銀薄　十枚

石ゝ味を細末して　併ゝ色銅へし

魚腸ふらんひらんち　百合ゝ二分を煮汁の
切口をあしめぎ　ゝんゝに魚ゝへし

一　鼻竹の病者い　鼻の中小ゝ　ゝ　ゝ
ゝゝじてい口中ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

△鼻竹すり一方

○人参　○甘草
○丁子　○せんゝ
○芹の根

石五味をすりゝ　刻合ていゝ
しゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　

ずきうの口の内へえんせるかとかくうの苦の
根をとかしてくすりをながしこむやうにぐんぐんふくして。
○百草の焼酒にて鼻のきへ吹入へし又口中の悪肉もしゐ
鼻の内のかゆかるかゆをあらはしてあらはしてよし
一鼻ひるのきへ膏をかゝらをふくし鼻の
きへうのかゆ出しものこと毎日ぬりむしうれく
きへこへひるの鼻よりもしこれ膏をふせ
相日ぬりあてて鼻のきの中へあをへへこと
必ひる出しかゆをあらはしかゆさしつめき
ぬかるゝこと引出しこれこあらけ膏をうりが
ゆへ狂ものひるかゆ出ものも

△ずきの十二月の病膏こと事

一月こゝの病膏は月のまいり暗くやこへふ
をうこへて月の内あしだらて肉色黒くて
ずきこゝらかゆ指ゝらはこゝ
きてこゝもしよつもをきふぶうれをる
こゝまえこゝふうれいやぐるこ

△月こゝ指ずに一方

○里このふ　○ちやかゝ
○熊のい
かゝこ味をあらこ合熊をうこ指

○石菖蒲　○ものまたろ　二色を刻みあわせ
せしこしかけやくはけ　仲こ味こ花茶碗の
合薬をふせ目の目ふさしこ
△目　茶一方
○ちんとしや　○鶴の
右二味を四の目かけ加減の半　加減して
薬の目のまいりこめりやこ目の目へいふへ
花このちこく
△目　茶一方
○ちやかしゅ　○甘草中
答の去のこけるあゆ
右二味を細末して併少色一方角に
魚形ちいらんひらんちおいこありこ形
茶の末の生末の桐の切口をあこめざん
ちこしこ
一ら目つこ目
△ら目ふこ目茶一方
○黄蘗　○古紙少
右二色ッ天目ゆあり一こ八仲こ二色の
茶をちるこあめ目ほゆやんとつめこ薬
をふせこ目のこらへ指ア也
△目　茶二方

ちゃくごとに加減の色分の出るかゝるを、一
某目の内へ入れ、銀屋にてわせ
一目びるゝ事膏のまゝらんびるの抵ゝ
わせ出し、絶計をまけて膏をふせして、
出て目びるを併し計をかけ引出し、めし
るの光りの如く血の丸銀の小力つゝ出てゆ
た併し法へ入るかゝるをあて、指某ふ
い目ゝ痛の目某を用このゝ法せ

△洗十二膏の底某

一膏の底分ゝるゆい光血しめ某分ゝ

△血留某一方

○あしもとの尾のゝ焼う○きんけゝや

△五八草

名ゝ味を細某してゆらゝ合底口へひ
移りかけ血留ゝゝ抜分某分ゝ法ゝ

△目某一方

○てんゝゝめん（かゝる紙のゝ）○ゆてんゝい
名二色を細某してゆらゝ合胡麻の油
少ゝゝ底口へめりゆせ

△目某一方

○こゝゝゝん一ゝ
○こゝつゝんけつ　二朱
かの芝の角の焼ゝ方　三朱
○五竜　黒焼二朱

黒色を煎ずしてそこの汁をこすべし
疾へ効りやすし

△第十五血瞬病腐る事

一血ふの病腐るにはかの虫をとらかつ
きまをしこれを病にぞけるゆゑ此ものを
もちゐふるに瞬目散のごとけ不腐る用
の法也

△虫くいつく事一方

○松掃子一朱　○沉香一朱
○小つけい一朱　○ちやくたん朱中
○天竺ぼくそ朱中　○胡のやんぶす少

○ひるこつ少　○きつとんきつ少
○金薄十枚
右九味を細末して毎朝大腐ゆるこまかい
かいの耳かきめもくい鬱腐ゆいこまくい
何ほどし虫をとるまくわつまをあけゆる用
ぶくしかしてもくしこ不を用不用法こ
△同第一方
○松掃子　○かしきのかこ（搗こなして造紙木也）
○いとこ　○虫をとる
あしを馬ようるを何をこふんを馬院
右五味を細末して不合毎朝

泡て何灸ゆゆゆ章門りんせい二ゆ当方
息門名こ一ゆつ灸ゆて

△汁十六骨乃ゆこ事

一瘡羽ふしこてゆゆゆ骨のゆてゆ骨
ひ乃瘡名

△骨つき茶一方

○くいちりるの根のいもの子の根ゆを洗ラ
ゆ玉さめゆゆたんしてゆて粉を酒ゆて
のべゆゆゆあぶりゆゆゆくいのゆゆを
しゆゆてのゆのねこ物ゆゆ何併こを
ゆゆる骨の頭へたゆ羽ゆゆ茶をめり

つゆゆしゆゆを湯柳のあつかゆの乃分
内ゆをちゆけゆゆをゆあゆゆゆる
骨のゆるゆざる根ゆゆゆ柳のかゆをあてゆ
ゆ上ゆかゆゆゆゆゆゆゆ又ゆいちり
のゆをゆ茶をゆりゆゆゆゆを弟ゆて
ゆゆ玉ゆかゆゆゆゆ瘡ゆ入ゆの内ゆて
ゆ瘡のゆゆゆゆゆざる根ゆこゆ併ゆ
ゆゆゆゆ何ゆゆ骨つゆの茶ゆ茶ゆ骨ゆ
の茶ゆ妙茶ゆ身秘傳ゆゆゆゆ日数廿日
ゆゆゆゆゆ併ゆゆゆゆゆゆかゆゆの瘡ゆゆゆゆ
ゆゆゆる羽ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

[illegible]

△貴次の内系

○つゝこ 後 ○くちなしこ 花

○去竜 馬焼 ○こうこの姫

○くゝこ

口あの味を細末して水合する一度ほゝ大腐れいたゝく 解毒に用ひる

い鶏腐れいこをゝ

△沙十七こうせの病腐る事

一こうせの病腐る股のゝゝ人の新發の

ゝゝ腐れ出る

△こかせ系一方

○黄蘗 大 ○ゆうゝ中

○あかね小

口こと色を細末して合系 光かさく

紙汁をゆ亮ゝて血を取相伴ゝ系

と出ぬかけ分ゝ

△沙十八足けの病腐る事

一腐るの足くかてゝゝ元ゝゝの

ゝゝの時分系

△足の腫系一方

○ゝぐゝかゝ馬焼 ○牛の汲の馬焼

○ひんとうせう　○せきさん
○そうゝや　○ゆうはい　○ホトヽかゝ　燒ケ
○立ハリよ

右十味を細末にし水合和ぶうとをとゝかさと鶏の血と色の赤るとを合てとゝ汁にゝ併こ七味の粉末を称り合稀とする是へあくく細ゝに水ぬり法はつるもとゝ亜こて必種引戸ものこ

△同　某一方

○天ひんこやゝを粉末にして四ホトのふのようにて法をハウ元あぶりこゝあるとを吹いこゝあるこの汁にゝ併の天ひんこやゝを称り合稀とする是へぬり一戸こ

○茯苓
○甘草
○燒塩

右の味を細末にしてあるとを紀稀多るあしへぬりこ

△同　某一方

○人参
○燒ものかゝ　古保甘四味燒ナリ彩ナルへこ

朱の後黒燒

○川芎黒燒

○ちやう〳〵　○天ゐんせう
名ゐ味を細末し麻子少合大豆のこゝろ
の油にて練り合指さる目の上一分十
一　魚の目のくすりこゝろの形ゑるくゝ指て
ゝめ〳〵事ふゝかぬ様にせ
△魚の目洗薬
○茵蔯　○櫟（レキ）の灰
○トウシン燈心草
名こゝ色を赤ゝ合い小もちくせんて
魚の目を二日ゝ洗やうゝけ初魚の目
の上を十文字小刀目を
あ〳〵血をやうゝ小刀目り出し
△目付薬一方
○ゆうゝ　○茵蔯
○猫の肝薬
名こゝ色を細末して赤ゝ少合併切
さゝさる麻口へ出絹ゝつけて上を貼
つけ薬のゝくいこゝろのゝを紙小おし
ゝけ麻口を二度計ゝ返して
事をくもてゝ指まゝ赤ゝ
むゝ少くゝいこゝろのゝをつけ仮
ゝ事の人ゝけゝ

○十日も切うへ血とし　ぶこと多の
目より大きゝ只のこゝの腫物あこと見も
多の目の寄治すゝ目ぶあこかゝ多ゝ
て切さゝ荷弟あゝ　あゝさる孔よ段
ゝ切さゝ血をれこの中こ又多の目ゝ
たこのゝ多とゝ　ゝ中ゝ赤をつけ
くゝ大孔の多の目ゝ　ゝこ治する
赤よゝゝ

一　いどりゝゝ痛の只のかけ孔のくゝてゝ
ゝの中けゝ人のあゝゝの孔よゝゝ
ゝのも

△いゝゝ赤一方
○女の髪のわゝ馬憐○たゝ馬憐
多ゝ味を煎ゝてゝゝゝゝ
ませゝゝゝゝ　ゝゝの口ゝゝゝ
多中ゝ孔ゝ痛の　ゝゝ孔ゝゝを
くわめけゝ　ゝ孔ゝゝ
一只ゝ　ゝの痛ゝゝ事ゝ
血ゝゝゝ　ゝゝのゝゝ
げ骨ゝ　ゝ

△只ゝゝゝ一方
○ふゝの多の目をゝ

呂一味を煮して服すべし

○目赤こだけの瞖胃散を用ゆべし

一こしの痛のかたへふぐの目の形を彼の油にて煎ぜし

△牛十九毎に病者に事

一毎に毎とりの病者小牛一毎絞し

為に者は毎持る毎をやきふりかけ必

を毎とらしめ也彼病者何日病を指

ぬるものにこしし

△毎とり日赤一方

○川かに　ゆきあかに牛者をふせて

毎の者を者の口なあをを用ゆ

△目日赤一方

○こやしぐん　ふして

呂一味煎して毎中色この角百病者

を用ゆ

一毎をもいこうらにもとしてもいさ

ちる者小毎に角百を角を毎をしてせ

の於ぶしてを毎をもしたして者ふせ

ちろくこと於の中一方へ毎を後赤

とりて茶小鉢にする一日に五度宜しき薬
なり茶小鉢に用ひて日より強薬を少
つ用ひし

△薬茶一方

○大黄　○巳豆　油にあらず　○ちしゃ

右之味を細末にして赤ふる合大豆程丸
しう大腹水に之粒鬱腹水に之のこと小
丸しと粒腹をふせてちと茶鉢のやうに又
薬をしの角を薬色黒くなく
さきに黒しの薬の色も白も

かくしの薬を出さず腹を用ひらること
薬をしの年寄ちいるやうに若又脈い
黄腹他水に腹水に薬をしのとえ
拭ちしこしりやとしかい拭出しそ
たらうしいつめしいとうさ用尾をあげ
て足踏かしかく踏て黒しらしまして
ひかいちしこ

△弁立たちの病腹しの事

一あ腹山ゆりい対文法腹の四ようし用
らようけ上の出出拭一腹大事しの病
薬小ちしこたち病腹いさして出た

[illegible]ちてもつさへ[illegible]たるよりの
るゝ思つてしらいもを合悪ふふ定りて
せしてすもを合悪ふふ不てしあ無脈悪き
油を有又能用を有の内黄用多
く悪用をくるゝ為て苦事有乃よ
つよいをしけるゝをしるものくを玄い併の有
の拍るふをゝい先たりつ不を何有の
京桑をえこのヤせ

△たけつを不一方

○古深分不硫の形　○いのこりらの根の形
名二不を御不してをゝふ合併よ色乃

の何不ゝ[illegible]りふ何ヤせ

△回不一方

○五月四日ふ九ふ蓮の根をもくせんして
小るの油併よ併汁ふ折て何ヤせ

△汁ヱ一ゝらふ血を対有有ゝ事

一ゝらふ血をまぜくらるゝ玄い血をつる
し有有い大事し出ふをゝし息ゝやく
を[illegible]いりんせいせゝとん息門ゝふの灸
りりくさくく大有ふ
らふこ央灸をくゝ

△血ゝらを不一方

大黄八 一両
甘草 一歩
○ちくとうきつ 一歩
○そうはくひゃ
○沉香 一歩
○かるこ 一歩
○ちやうつ 一歩
○去竜馬膠 三朱
○くまつろ〳〵ふん 三朱
○茯苓 一歩
○五八草 三朱
○ちくとうこん 一歩
○こうかい 二朱 紙包の内五十日
○こうこ 三朱 除くわいて二朱
○牛の馬膠
○こたくん 紙袋
○金薄 五枚
○銀箔 五枚
○いのこ丸の根 二朱
○ふくりう 一つ 一匁五分
○きくいちくさんの合茶 二朱
○あしたの馬膠
○ぎんせうこの実 一朱
○人参 二朱
○白芷 六味を細末して少々
ずつ水丸に金箔を敷して大豆ふ
いに程ずつ一日ふたゝび飲ゝ
豆ほゝに一程ずつ一日ふたゝび
とゝや風病豆ほゝに
△汁七二ゐ
十ゐ
ゐ
ゐの病豆ほゝ事

疱の併きとる所をんん併いようやしく膏や
いとく次第小膏のうてをけやし

△あらうてすぐ一方

○ごとけの瞬胃散り用てもてしや

○あつすぐの思すぐ薙の馬鹿の事や

○をいを散も用このもてしい

召こ方のすぐ所部要併小色大膏小い
一度よこ色疱日小三度用翳膏
小を或色て見を日小三度用やしを
をかてめて併の用紙い大膏に一日小
薙二度こ度小を膏の併

をおしらの指やしら膏のいをやらいよ
てを召て通細小併を用和ら色を
あをうをを色を能ゆやをうを小肉を
用ら用薙一疱を多く併かを用
小けを肉をを寄召行要ると一をを灸
小よいをん中門いるを小疱を
くをあて灸を一併膏の肉材小
をけをを小肉の色あをうをいるいすぐ用
このをを

△万病円をい手散一方

○ちやをを除てをを。をををん一朱

○ 御ものゝ少
若こゝ味り御ゆして毎よ包用へし

△ 汁六こゝ酒酒くゝる病者ゝ事

一 酒酒の毎遠し者白米て者ゝ
くむし脈い毎遠しくゝ不ゝ毎遠
ゝ不ゝを用てゝくし口ゝうあゝをくゝ
のゝをつきて者ゝつめよ米わよゝくし

△ 汁七四ふくゝて病者ゝ事

一 ふくゝの病者い白ゝかまりてゝか
のゝくゝ小米ゝをゝわよゝくゝけ
の状ゝくゝしゝるし不小いゝくゝけの不
用魚ゆゝよゝくゝ
中也

△ 汁七五かゝこゝんまい不ゝ事

○ ゝよの産たゝ日の死ゝ子のそゝ
ゝうゝをかゝへゝを細の湯ゝくゝ天用小
ゝ一ゝい入ゝ物ゝやゝ不ゝ中ゝ
乃ゝ大者小ゝゝゝかゝの耳かゝ二ゝかと
鼈者小一ゝ毎ゝ包ゝ用ゝ一不ゝ荒者
を一日二日小ゝをゝたゝゝるゝけ用ゝ
妙不ゝ又ゝ者の肉者ゝくゝを係大るゝ
ゝ小ゝゝ合ゝを度ゝ用ゝ用のゝやゝ

[illegible]
[illegible]
[illegible]

△[illegible]

一ごたけ病者いたるとき血の
[illegible]のもの出る[illegible]
[illegible]次第ふつかの間有り
[illegible]出ふとき[illegible]者
[illegible]おいたる玉[illegible]の肉も
息合[illegible]息をとる[illegible]
[illegible]息門[illegible]の黄水
[illegible]けの人参散脾胃散
[illegible]血つきたを一年
[illegible]専也

△[illegible]者の肉ねあるは黒色
[illegible]分[illegible]

○天[illegible]
○[illegible]ふん
○[illegible]色[illegible]
[illegible]の汁[illegible]

△瘡ゝ灸法ゝ事

一面いの灸ゆいかゝらゝもの病瘡用ゝゝの
病瘡皇けの口唇の病瘡ゝゝや風の病瘡
ゝゝの病ゆ用ゝ灸ゆ奈の木をあゝめ
ぎん灸てゝゝゝ

命門に灸すべし病者併造の
病者口中の病者血脇の病者
名口色に炙よりくさくさこと灸亮灸
この七ところ

一息門の灸すべしけの病者息奈の病
者ふくもの風の病者ふくもの病者ふら
たけの病者
名五病ふのくさくさて五灸亮灸一七ところ

一おいもの灸すべしけ口腰
名口色に炙る奈の味をこかしこかん

一小がらの灸すべしからけの炙口中の炙
名二病る奈の味をこかしこかん灸て七
ところ

一こけがいの灸すべし口中の炙奈の味ところ灸
この七ところ

一章門両穴の灸すべしさのこるのあげ
骨の上枝のこるのせんの炙つきくぼこて灸
すべ胃りくらもかこのこのこるのの
胃すべ七ところ中一ごけ病る者すべき
ぐさくさ大者すべし五灸七灸弱者

一ふいこの火毒の事をふうう灸すべし

一りんぱいあるの元の灸ゐ　あいの下七番の穴の

うゑり股のつけ根くぼ　置きべし　病ゐ所

一血脇の病毒腐の如　病ゐ毒の条

色ゆうめぐさうて大毒ゆいめゆさ七ゆも

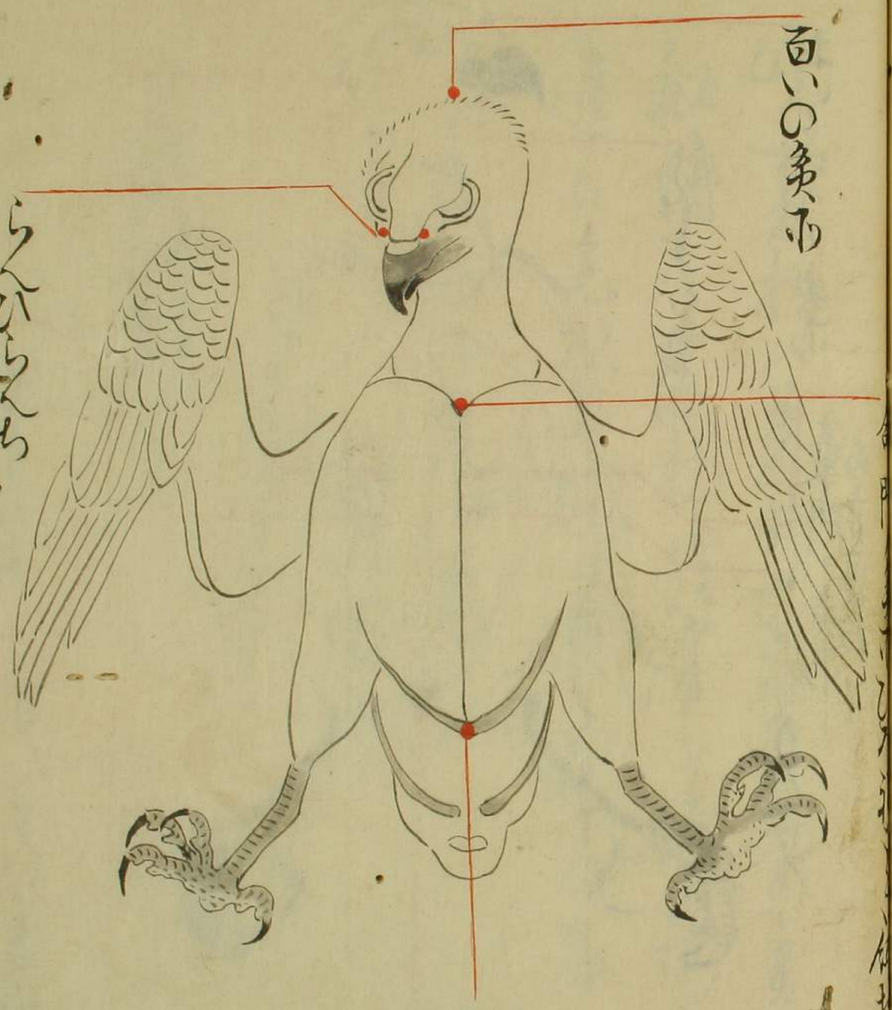
鬱毒ゑ赤いこの灸　灸この上べし

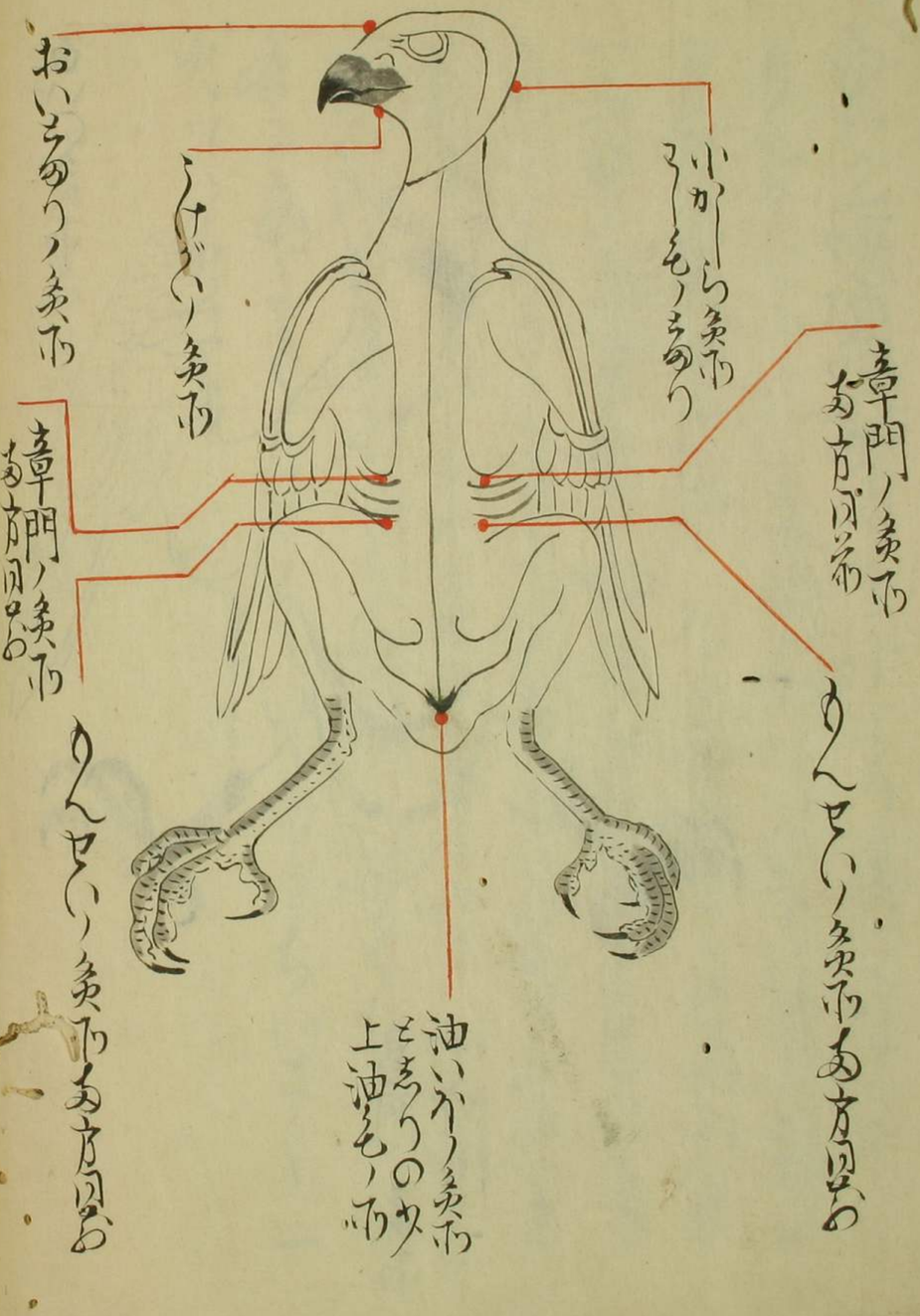
一油いゐの灸ゐ　うゆ風　ふべ

右二病よめぐさうていうゆもちいさべ一

火ッ、灸て上べし

灸ゐうう





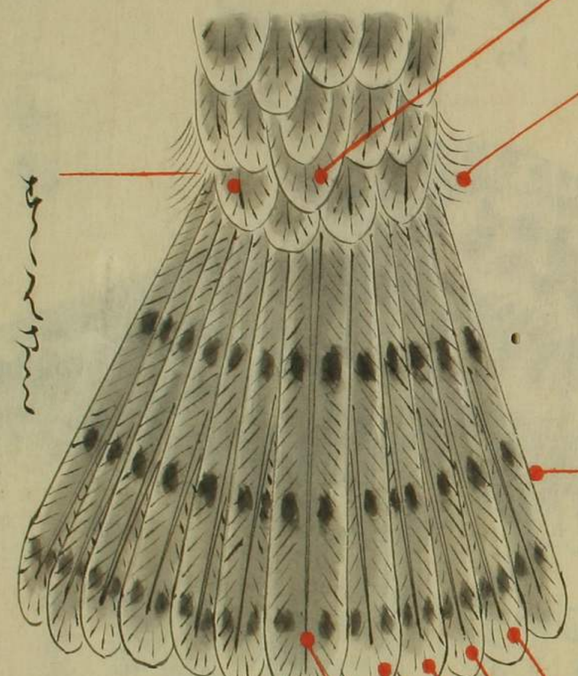
此書物は荒井立節氏と申者に
秘傳に書物渡有し依而写
進ぜ申候也

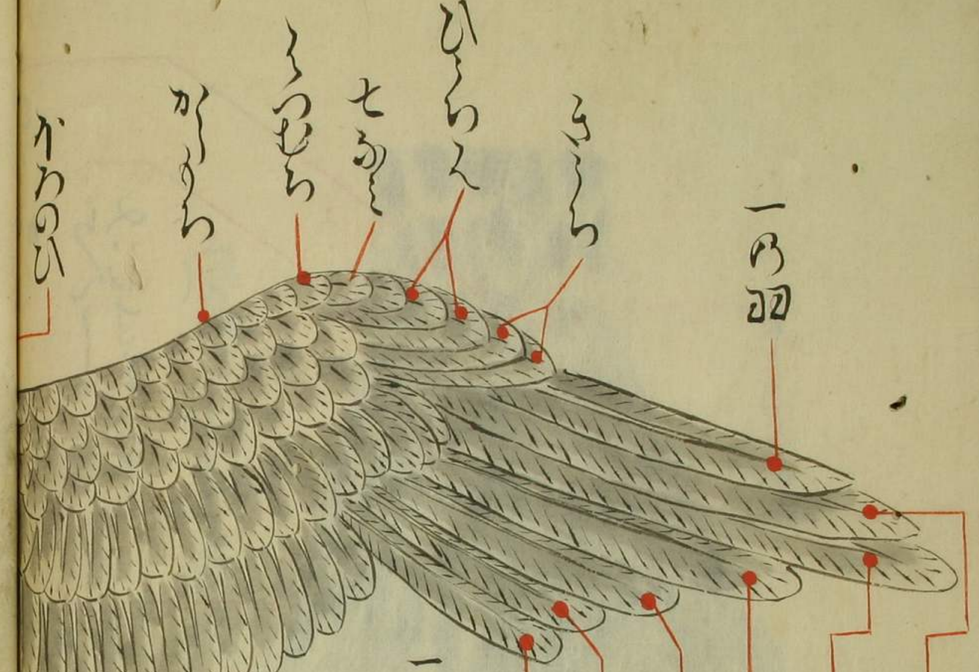
正保二年酉ノ
八月吉日

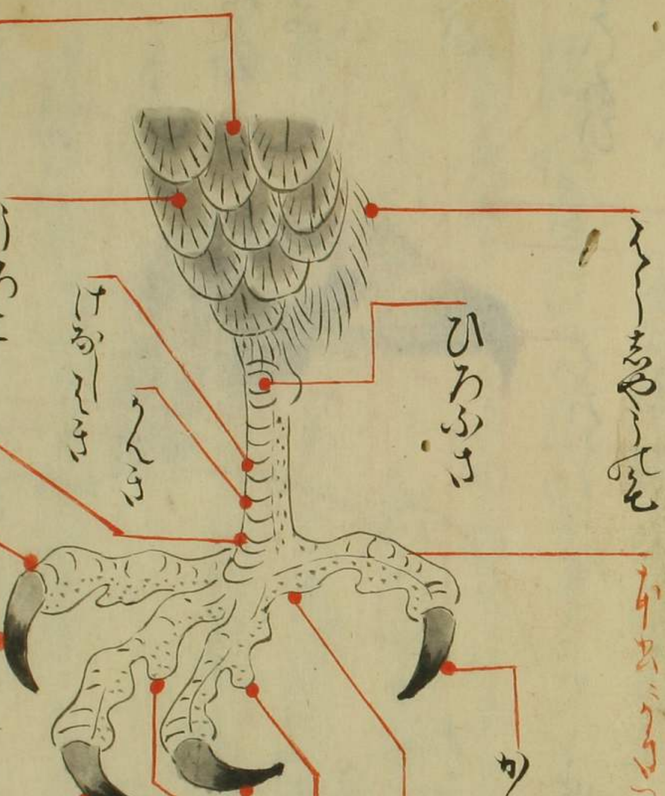
鷹目利書

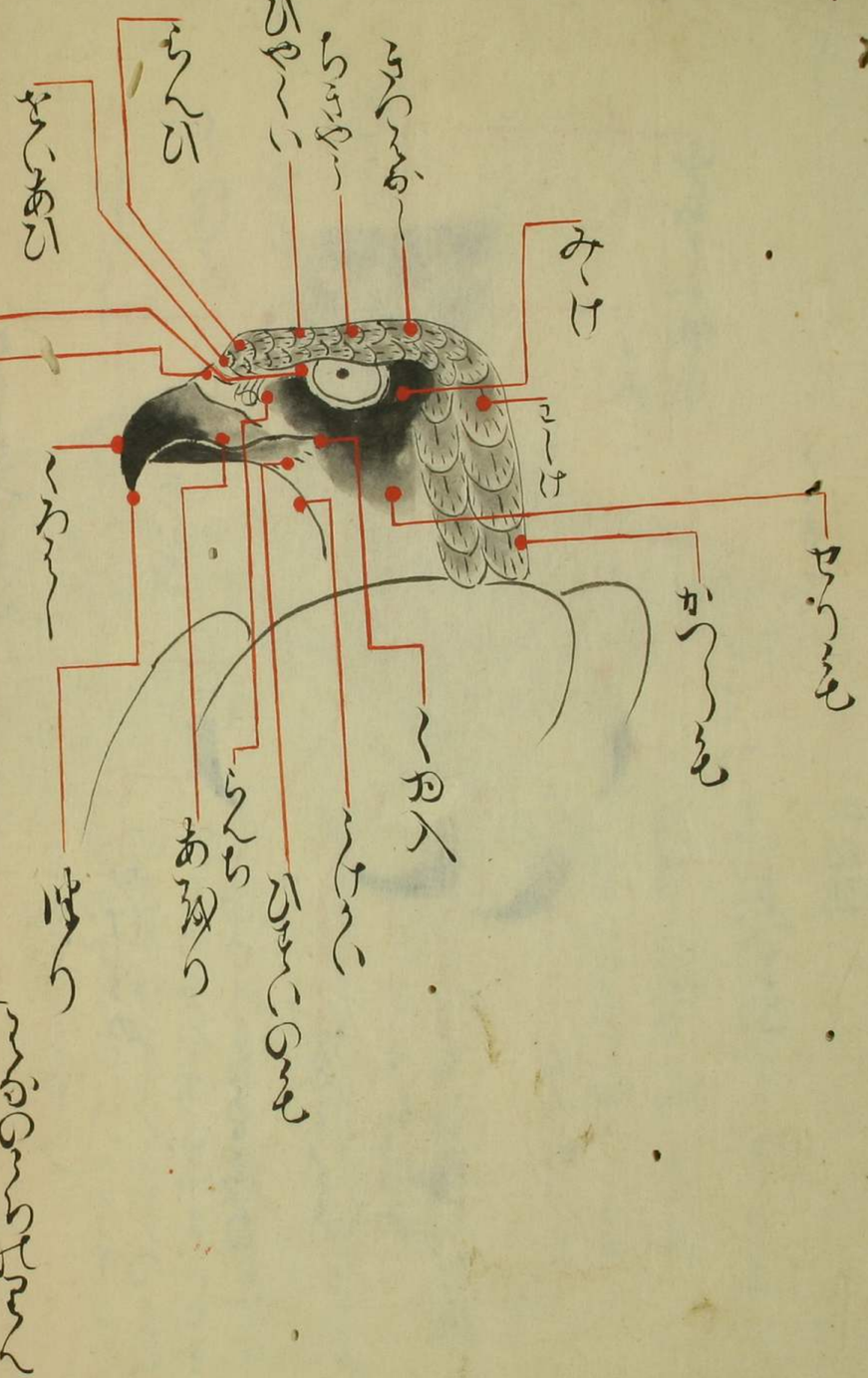
但名所繪圖

鷹羽名所の事


大しらら
小しらら
ひたやく
十二のやまん中にあるを
尾とゝ尾ゝとゝ四十一枚
十二をゝ入ゝのゝいに
まきしるゝと月にあまる
とまりとゝ又十四枚


一の羽
二の羽
三の羽
四目
五目
六目
七目
一の羽
十一枚かわり十一枚
内は四十八あるかわり四十
羽ばかりはえかわる
をは四十八ばかりはえかわる
ものなり





一陰陽の鳥の又花の事

○陰陽の鳥の同利の事

鳥花方へまきあめありてくらんちのもと
てくい入ゆ　形いふのすゑ長し
てこ〻ありて長く尾ふとくして羽
ぬ〻ふ抑こ鳥のかしらかふ〻ふゆ
ゆ也

一陽の鳥のりん花の事　らんちのもと
ウ〻方へまきあありて鼻のすかふ〻
〻もく〻てこ〻ありて長く鼻もかく
ウ羽ちのさに抑也

一十二想敢の内小三夏三後生一三月の前
迄く分て和あいの毛起さ〳〵て
づ〳〵く〳〵かう〳〵くの人婦〳〵小ゑ毛に
して起ねもしく羽やぶちもきんこ
尾を地尾ホ〳〵て毛ぬつまやうこもふ
〳〵ゝゝ後くゆ必なふ死かもく後
くて形をかふをかつるやふ〳〵
て月のゝいの性やいうかさく尾ふて
むし赤の者の月刊の大夏を月のゝ地
秘傳ゝ恵ゝ者の月の内の性やいかど
ふ月ゝ夏の月ゝ〳〵あゝ〳〵まいやゝ乃

ゝえゝひいゝうの赤ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
月の上中の性やの赤ふこの有ゝ
何敢ゝ〳〵ゝ月ゝ月ゝ小ゝ〳〵ゝ
のゝ赤ゝ月ゝ性ゝ〳〵ゝ者
有ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ十二想敢の者を上ゝの
者の小ゝ〳〵ゝ〳〵ゝこの有ゝ〳〵
一性の者の夏の事乃ゝ十二恵敢の
夏小の月ゝ五ゝ小ゝあゝ〳〵性の者
為ゝ〳〵後月の月の内の性やいかを〳〵
ゝゝ乃十二恵敢の月ゝ小ゝ
ゝの好ゝゝ〳〵ゝ〳〵ゝ者ゝ〳〵ゝ

この身をもて

一十二想観の中の意の用ゆる所をもて
こゝろをとゝのへて意の所ゝ上の意を
ゝゝ先こゝろをもつて
かしこゝゝゝ

一中の鳥の事

何にても鳥を中の鳥とも

○十二鼠の次第

はつり鼠の大概の事

そもそも大きにして海辺

さしかからぬ山鼠

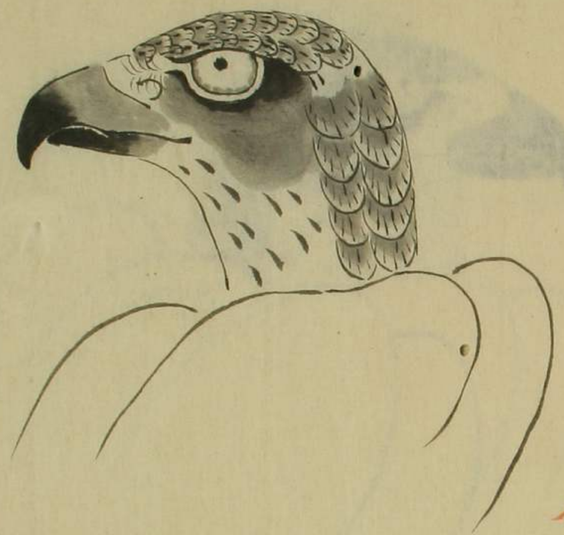
心勇ましき者にして

ふかく使

みさご鷹の事

雌

らんひらんちあつく
ちちちあつく高く
鼻のつちへ高し大孔
涙の高のみさご高の
孔からちり似らんの
ちちふち後



めんちり鷹の事

雌

かしらまるくして
ひさしちらんの
いへ淡く鼻のすまる
きちんよりおちて
して一脈悪き高
の孔し

角しこ鷲之抵の事

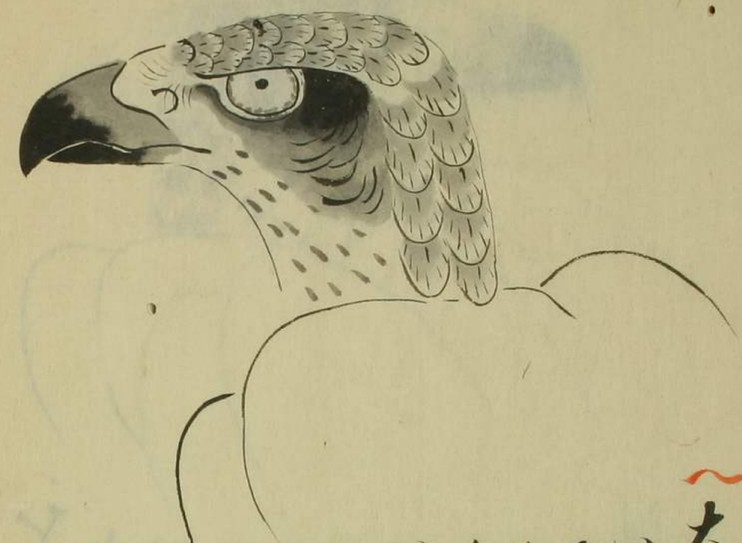
鶩

かしらまるくくい入
淡く目の前ちゝく
海ひさゝかからだの
淡くして大なる
丸かゝし

とんこう鷲之抵の事

雄

かしらまるくくい
わかゝの毛ゝ之下
ゝゝにして
角ゝこゝろゝ
ふゝ使者し



大まり目ふくろの事

かしら大さまりかして
目大きくしてまるく
さんめんあつく目の前
赤くあつくひさし仰く
かりてまりてをる
てはくるし世間いか
仰くこれまるゆく
ようき者のこと

はしかけふくろの事

鵲

かしらそくそくしろ
きんつくるしの下のえぶ
てがどあるやりまかし
ら平くして面はさ
仰くかりくい入仰
くふくちゃてらん
ひらんち落きくびた
うな大にてりめ
きくてれもむるにを
ふの

魚ひろ目の天狗の事

かしらいかめしく
入目をとがらかして
まゆさしいかめしく
毛もかみ〳〵ほそく
ほひさしのながい
目をく〳〵分目の
ちかくしるやうに
ながくさきなる
ほうそくらんひらん
ちかく〳〵して鼻
のすまるしほそく
して下顎一枚の嘴
のかたちなり

嘴長天狗やうの事

かしらかたちめにて
さかさまなるしの下の毛
をとて目の前遠く
分て鼻ひさしほそく
ながく出て入
ほそく〳〵かしら
ひらんちかく〳〵
ほそし式部の嘴さん
ほそく一枚一枚也

まゝはゝ鳥の事

真

かしら赤くして
まゝはゝ鳥のかたち
まるくさしたんめん
黑くてそのまはりの
ひらんち黑き
しぶきの白い雜毛の
ありし

小鷲雜毛鳥の事

まひさしの所かしらの
目のまはりまんにふち
かつけのぐるいの
所はなのまはりも
らんひらんち黑
しぶきの雜毛鳥の
ありし

大鷲就入れの事

かしら高くらいさしてこしの
わかしら平らにして目の
前をくつきり目まで
ゆしめ目の内ちいさ
くしてこけうつたり
こしをしまりまくし鼻
のすうひふくいりもも
をしくきこしのくをく
かしうさんめいふと
高くこしふくして
らんひらんち高くして
鼻のたかの中くして
一段一あし

天福鷹記之傳十二顔

鵰顔（ソウレカシラ）　鷲（コウレカシラ）、鶚（ミサゴカシラ）、鳶（トビカシラ）、烏（カラスカシラ）、
鶖（サギカシラ）、鵁（ミレウカシラ）、鵐（ムレウイカシラ）、鵐（モスカシラ）、鶻（ツミカシラ）、
鵲（タカ、シラ）、鵂（ハヤブサカシラ）、

此外古来ノ書ニ
真顔（ニカシラ）　鵰（コメカ、シラ）、雄（ワトリカシラ）、虵（ヘビカシラ）、鵄（リスカシラ）、

[illegible]十二銭のかゝる因利の因に第一因の因
のはやの[illegible]悪こゝに銀上の銭の高[illegible]
[illegible]ふ也こゝて銀代[illegible]四因[illegible]
[illegible]因[illegible]第[illegible]因のこゝの
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
のこゝ[illegible]の因のはやこゝ因の
の因利第一[illegible]
合因のこゝ[illegible]合因の上中下[illegible]
[illegible]及[illegible]

○ 背黒の鳥の図の事

白き鳥ハ半一つ毛の色黒くしてしかるやうにけいく
ちの羽黒き鳥のやうに白き毛半
所のくちばしの羽くちばしのやうに白き毛半
こゝらくひのまりり鼻も白きし半こ
目の目かけやうに白目のやうなるし半白
くちも色半の時のかさきさるやう
去ちくちばしてくちばしに立つもふし
くちばのかんぐ指まて赫の足のくちにやい
らうに白かりくぐさし半らの足先ひきや

乱舞中

くはの羽二重ほどなる白きを角七つ
こせたるの角ほそくわこかのごとくなる
角のさきこ羽ゆくてんてん白く茶角
ゆふくてんく白くやくこ黒き角いきを白く
やくこかくこ通てわひて白き毫ゆる白
とやも

一
毫のまこりの先ほそく毫より白きほそゆ白し
とやも

一
かくたいのまこりとより白く角をくき
かくこゆ白とやも

一
羽のさきも尾ほそきも一二枚白きをくこ

一
毛の白とやも

一
毛の白き下のほうまこゆ白とやも
かくこゆ白ほそく毫の白ゆて角くこ又你
山白くて毛ゆ角もふくゆふゆ白き毫
角くこ異毛くこ毛たくてくこゆ
ゆて先の毫ゆ毛ゆ白きい
源山白とやて一ゆ(柄)毛ゆ角こたてほ角
ゆ毛のゆまくこくこくこくこゆ毛あく
毛先の毫のまくこにくてくて異毛と
白くこくこ毛足ゆゆまくこゆくこ白の毫ゆく
ゆまくこゆくこゆゆゆゆゆゆゆゆ毛の毫ゆ

毛を引ぬかるもの也

一赤目の角の高い羽ゆと尾ゆとふくらん
毛をしぶくして茶の角い赤て紅いゆゆ
ゆゆ尾ゆかつてゆるやゆゆゆゆゆ目のゆあ
ゆゆゆゆゆて尾の内ゆ八文字の角れ
やゆゆゆ角ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

一赤高のゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
羽のゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

一尾ゆの高ゆ一枚尾ゆゆ尾の高ゆ
ゆ二枚尾の高ゆゆ尾高ゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

紫保鳶ノ見所七有ル事
其ノモヤウハ小紫也
一尾ノ羽ノ背紫色シ
一尾ノ羽ノ内黑シ
一ロノ内黑シ
一目黄色濃キシ
一尾ノ文字背アリ
一蛛手白鳶ト川和鳶カニキトヽ

○鷹所のいましめ条々

一 尾羽を抜さる事

一 後あうにて鷹ふく事

一 当流偏条々所々不申下に鷹を抜ふく事

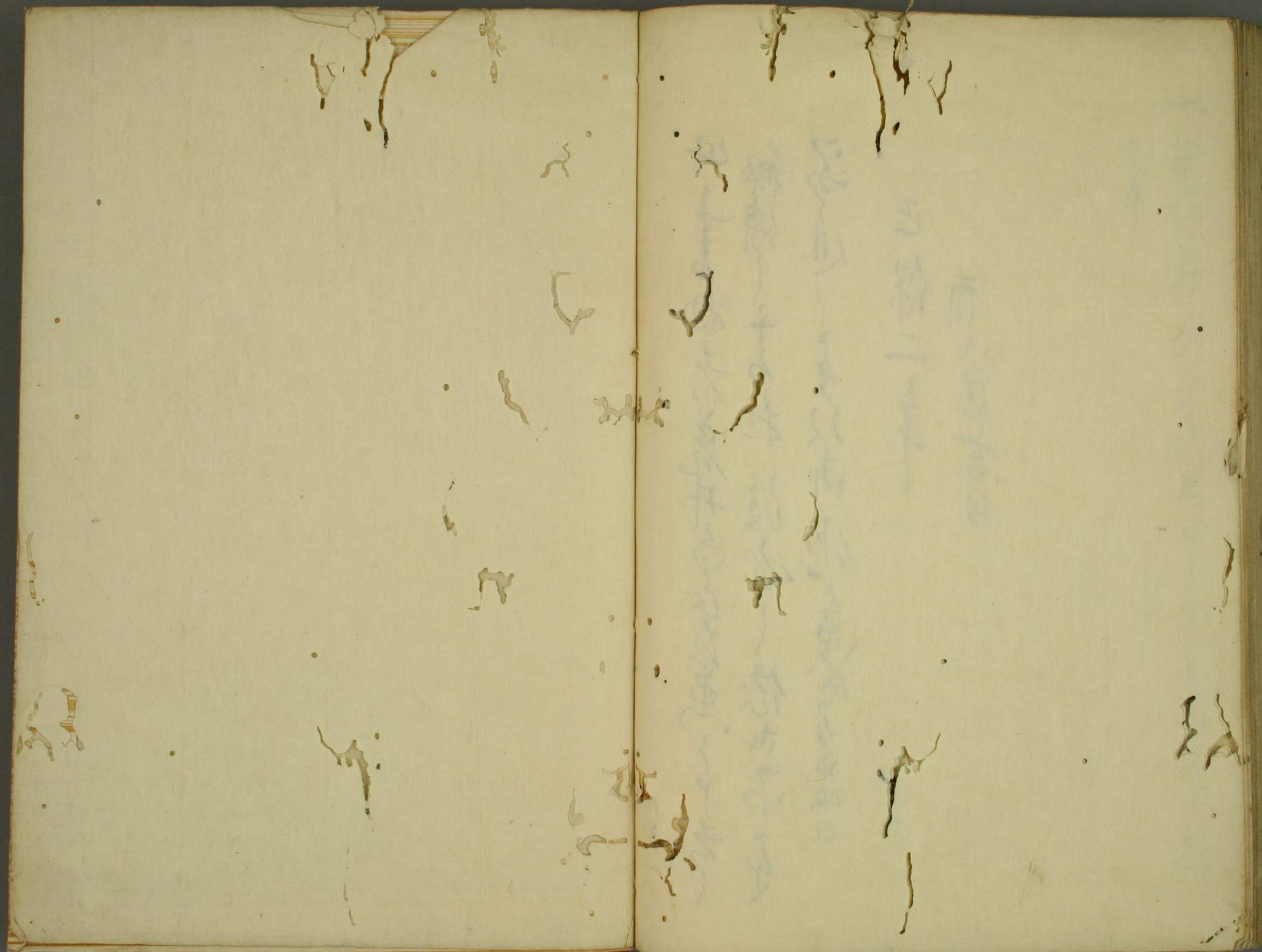
一 口伝とふ何ぞ有よ嫌ものあゆてこゝを
ぬゝ口伝を何伺考こふて分事

一 鷹の条内さ鷹ものもたる日のせざるゆゑる
ゆ不九るをふて合事

一 かこゝやらせぶべうさる事

一齋之方何分指定之事

特

件書物者為井戸氏在世之中者
秘傳之書物後者依世不定
另進之之次第也仍為安心

正保二年
酉八月吉日